

デリーに現存する奴隸王朝 末期の墓について

荒 松 雄

目 次

- I. まえがき
- II. いわゆる Sultān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓の遺跡について
- III. むすび、および若干の私見

I. まえがき

この小論は「サルタナットの首都デリーとその遺跡に関する歴史的研究」の一部をなすもので、さきに『東洋文化研究所紀要』の第33・34冊に発表したところの、デリーに現存する奴隸王朝の初期、および中期の墓についての二つの⁽¹⁾論考につづく第三の論文である。内容は、さきの二論文と同じように、デリー＝サルタナットの最初の王朝である、いわゆる「奴隸王朝」の末期に属するといわれている墓で、デリー地域に現存している建造物を中心とした歴史的考察である。

私がデリーに現存するサルタナット時代の遺跡と建造物に関する歴史的考察をつづけて発表する意圖をもつに至つたいきさつと、その研究の目的、対象、

および問題点などについて、さらにまた、これらの論考における私の方法とその限界などに関しては、第1論文「奴隸王朝初期の墓」の冒頭に記しておいた、⁽²⁾かなり長文の「序文」に述べられている。従つて、本稿では、それらのことからについては一切省いた。

さて、私は前稿第2論文では、奴隸王朝の「中期」の墓を対象としたが、ここでは、Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish (シャムスディーン=イレットゥミシュ⁽³⁾)の死後、その直系子孫五人がつづいてスルターンに登位支配した時代をかりに「中期」とよんだのである。その五人の直系子孫のなかで最後に登位した Sulṭān Nāṣir al-Dīn Maḥmūd (ナスイルディーン=マハムード、第1論文で主要な研究対象の一つであつた、いわゆる Sulṭān Ghārī (スルターン=ガーリー)とよばれる墓の主人公の Nāṣir al-Dīn Maḥmūd とは同名であるが、これは別人で、異母弟に當る人物である)の死後、彼に代つて、その治世にすでに nāib (ナーイブ)の地位にあり、Ulugh Khān (ウルク=ハーン)を稱していた Balban (バルバン)が Ghiyāth al-Dīn (ギヤスデッーン)を稱してスルターン位についたのである。本稿で私のいう奴隸王朝の「末期」とは、この Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の登位にはじまり、いわゆる奴隸王朝がとだえてサルタナットの権力がハルジー朝に移るまでの期間をいうものである。

さて、さきの二つの小論で述べたとおり、私は當分の間、墓についてはスーフィーの聖者の墓廟を考察の対象からはずしている⁽⁴⁾ので、本稿でとりあげる奴隸王朝末期に屬するものとされる墓で、デリー地域に現存しているものは、ほかならぬ、上にあげた Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓といわれている建造物だけなのである。

この時期のスルターンに關していえば、Balban の死後、奴隸王朝ではなお二人のスルターンが登位している。それは、Balban の子の Kaiqbād (カイクバード)と、その子の Kaimurs (カイムルス)との二人である。そのうち、

Sulṭān Muḥizz al-Dīn Kaiqbād の方は、サルタナット時代のある史料によると、デリーの東郊 Kilūkhārī (キローカハーリー)⁽⁵⁾ の王宮で暗殺され、その死體はジャムナー川に投入されてしまつたという。そして、彼の墓については、それがこれまでいずれかの地に存在したと記しているものは、誰ひとりとしていないのである。奴隸王朝の最後のスルターンの Kaimurs の墓についても、これまでそれに當る遺跡も指摘されていないばかりか、全くなにもひとつわかつてはいないのである。従つて、この時期の三人のスルターンのうち、ともかくも、その墓といわれる遺跡が残っているのは、Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の場合だけなのである。

しかし、この Balban の墓とされている建造物は、のちに述べるように、現在、廢墟とよぶ方がむしろふさわしいほどの遺跡にすぎないのである。今日、デリーおよびその周辺の遺跡の多くは、Archaeological Survey of India (インド考古調査局、以下本稿でも A. S. I. と略稱する) による“Protected Monument”の保護規定を記した青色のプレートがかかげられているのがふつうであるのにもかかわらず、サルタナット史上もつとも重要でしかも著名なスルターンの墓とされてきたこの遺跡には、それすらも見出されない。そして、遺跡は、もちろん露天で、荒廢するにまかされたまま放置され、現在の状態をつづければ、おそらくは数十年のうちに、あるいはもつとまえにも崩れおちてしまいかも知れないほどの状態にあるのである。

従つて、もし、サルタナット時代の歴史になんらの關心をも寄せていない人びとがみれば、この墓は、一見するところ、美術史や建築史の見地からはほとんど意味もない、しかし一風趣きのある、變つた廢墟としか映らないであろう。しかし、實は、この建造物の遺跡は、それがこれまでいわれてきたように、もし Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓であるならば、サルタナット初期の建築史はもちろん、ひろくインドにおける建築技術の發達の歴史のなかで、とくにその構造上の問題において、まことに重要な位置を與えられるべき建造物な

のである。そのことについては、のちに述べるが、ただそれは、あくまでも、この建造物が *Ghiyāth al-Dīn Balban* の墓であるという、これまでの諸著がほとんど認めてきた従来の説、あるいは少なくとも、それが Balban 時代前後のものであるという推定を前提としてのみはじめていい得ることなのである。もし、この通説あるいは推定に組しない場合には、この建造物についてこれまでしばしば指摘されてきた建築技術史上の重要性は、ほとんどその意味を失い、この墓の歴史的意義もきわめて少ないものとなってしまうことは間違いない。

ところが、従来、この墓についての歴史的考證は、デリー地域に現存する他の多くの建造物の場合と同じように、あるいは、むしろ一般の遺跡の場合より以上に、決定的な根拠を欠いているばかりか、この重要な歴史的考證が、ほとんど正當にとりあげられることなく、多くの場合傳承または通説とされる漠然たる推測に據るのみであるといつてよいのである。もつとも、それには、これからもうまく述べるように、何らかの結論を導くためには、決定的な資料がほとんど欠けているという理由があつて、いささか仕方のない面もあるのである。ただ、さきにもふれたように、この墓についての歴史的考證は、単なる年代の比定や、あるいは、この建造物がはたして Balban の墓かどうかという、歴史的考證なるものが本来もつている通常の意味だけではおわることなく、いわゆるインド＝ムスリム建築の發展の歴史、とくに技術の變革に關する大きな歴史的問點にかかわる重要性を指摘できるか否かということに關する諸問題を控えているのである。従つて、單に通説とされる推測や推論に依存することでは濟まされない理由が大いにあると、私自身も考えるわけである。

ところで、この問題の廢墟の遺跡には、いわゆる歴史碑文はもちろん、その他の碑文やそれらしきものは、現在、全くのこつていない。本稿に載せた寫眞（挿圖1）でわかるとおりに、全くの廢墟の遺跡なのである。ただ、南面の入口の向つて右側の裝飾偽窓部分のアーチの粹部の向つて左の部分の一端に、辛うじて文様ではないかと推定し得る彫刻のあとが斷片としてのこつているのは、

きわめて貴重な、注意すべき資料である。これはどうみても文字碑文の断片とはみえないが、石彫ではなく、あきらかにモルタルの表面の残存部らしく、それがこの建物にとつてオリジナルなものか、または後代に添加したものかは、剥して科学的分析でもしてみない限りはわからないのではあるまいか。しかし、ともかく、これは、さまざまな点で貴重な資料であろう。ついでにひとことつけ加えると、モルタルの碑文や文様が、サルタナット時代のデリーの建造物に、いつごろから用いられはじめたかは、まだはつきりと指摘されていない問題点である。従つて、それがオリジナルなものか、後代に添加されたかの問題をふくめて、とにかくこのわずかなモルタルの文様らしきものの残存している事實は、将来、この墓の時代考證の一つの問題点として、技術的に是非ともとりあげられるべきである。

さて、次に文獻に關してひとこと述べておこう。Ghiyāth al-Dīn Balban と同時代の歴史書は、正しくいえば一書も傳わつていないのである。彼の時代にもつとも近いもので、そのスルターンの治世についてくわしく記した文獻で歴史書とよび得るものは、トゥグルク朝後期の Firūz Shāh (フィーローズ＝シャー) の治世に書かれた、Ziyā' al-Dīn Baranī (ズィヤーウッディーン＝バラニー) の Tārīkh-i Firūz Shāhī (ターリーヘ＝フィーローズ＝シャーヒー) であろう。さいわいにして、この文獻のなかに、きわめて短い文章ではあるが、このスルターンの死と、その埋葬についての記述が見出されるのである。そして、のちに紹介するように、その文章の内容は、本稿のテーマである Balban の墓の考察のための主要な文獻史料であるばかりでなく、サルタナット時代の墓についての史料として、貴重な、珍しい性格のものといつていいであろう。この短い記述を除くと、サルタナット時代の文獻で、Balban の死後の状況や、彼の墓について直接述べたものは、インドにおける歴史書のなかにはあとは一書もないのである。ただ、右の Baranī の著書が書かれた Firūz Shāh の治世よりすこし前に首都デリーにしばらくのあいだ滞在したことのある Ibn Baṭṭū-

ta (イブン=バットゥータ) は、その著名な旅行記のなかで、このスルターンの墓についての短い記述をのこし、しかも、彼自らその墓を訪れたことを記しているのである。

こうして、わずかな記述をのこしてくれたトゥグルク朝の二つの文書が、このスルターンの墓について稀少な文献上の記録なのである。従つて、本稿で、もつとも主要な問題の一つは、これらの記録に言及された Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓と、現存の、いわゆる Sulṭān Balban の墓とされる遺跡とが、はたして一致するものであるかどうかということにある。のちに述べるように、このスルターンは、その生前に、おそらくは墓所とは別の目的で建てられたと思われる Dār al-amān (ダールル=アマン) とよばれてきた建造物のなかに葬られたらしい。従つてこの墓をめぐる従來の諸説においても、そして本稿の私の考察でも、必然的に、この Dār al-amān なる名をもつてよばれた建造物をめぐる問題が同時にとりあげられるのであるが、そのために、この墓をめぐる以下の考察にもいささか煩雑さが加わる結果となつてしまつた。

II. いわゆる Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓の遺跡について

1. はじめに

奴隸王朝の中期には、Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish の直系子孫によるスルターン位の繼承争いを頂點として、権力獲得をめぐるムスリム支配層の黨争は著しいものがあつた。そして、こうした情勢は、Sulṭān Rukn al-Dīn Firūz (ルクヌッディーン=フィーローズ) の子で、Iletmish の孫に當るところの當時まだ幼児にすぎなかつた Mas'ūd (マスウド) までも、Sulṭān 'Alā' al-Dīn

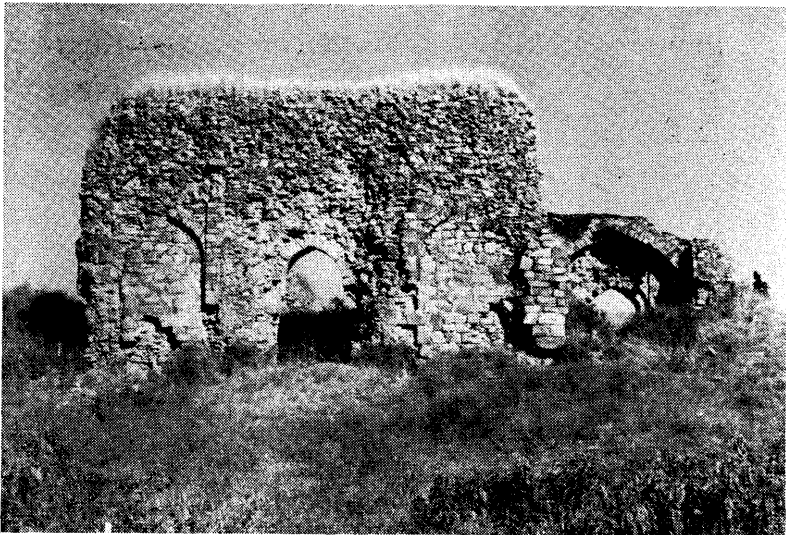
としてデリーの王座に載せる結果まで導いたのであつた。しかし、かいらいとしてこの幼帝をかつぎあげた貴族勢力も、その義兄で、Iletmishの子であつた Nāṣir al-Dīn Maḥmūd とその母、および amīr-i ḥājib (アミーレ=ハージブ) の地位を得た Ulugh Khān Balban の策謀によつて、ついにその勢力を殺がれ、Mas'ūd も王位から追われるに至る。それに代つて、644 A. H. 年の Muharram (ムハッラム) 月の 23 日、すなわち 1246 年 6 月から、Sulṭān Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の治世がはじまる。Iletmish 直系子孫のスルターンのなかでこのスルターンの治世はもつともながく、1266 年のはじめごろまで、すなわち約 20 年ほどにわたつてつづいたのである。⁽⁶⁾しかし、彼の死とともに、その nāib であつた Balban が、664 A. H. (1266) 年にスルターンに登位する。⁽⁷⁾この Balban は、Iletmish とのあいだに血縁関係はない。そこで、この事実をもつて、Iletmish の直系子孫であるスルターン、すなわち、いわゆる Shamsī Sulṭāns (シャムスィー=スルターン) によるサルタナット支配の時代は終つて、その支配権力は、かつて Iletmish の bandah (バンデ、奴隸) としてその政治的経歴をスタートした Balban と、彼を支持する貴族勢力の手中に移つたのである。

Balban の治世については、君主権の問題あるいは貴族との権力関係の面で重要な変化がみられた。その歴史的意義については、私もかなり前に私見を明らかにしたことがあるので、ここではそれらの問題については省略する。⁽⁸⁾ただ、彼が、奴隸王朝のみならず、サルタナット全時代を通じて、貴族勢力を抑壓して君主権の拡大に努めたスルターンの一人であつたことに、一言ふれておきたいと思う。

さて、本稿の中心的人物である Balban が死んだ月日は、正確にはよく分らないようである。Ziyā'i Baranī はそれについてはなにも記していない。それは、通説では、1287 年の半ばごろといわれており、その死の数日前に、Balban は、その孫の Kaikhusrāu (カイフスラウ) を後継スルターンに指名したらし

(9) しかし、サルタナット史上で強力な君主権を確立したこのスルターンの、死を目前にしての要請も、その死後にはあえなく握りつぶされ、結局サルタナットの王座は、Balban の長子で、ながらくベンガル地方にいた Bughrā Khān (ブグラール=ハーン) の子の Kāīqbād に與えられ、彼が Muʿizz al-Dīn (ムイッズッディーン) としてスルターン位に登位したのである。

ところで、さきにもちよつとふれたように、この Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓とされている建造物が、現在、ニューデリー南郊に現存しているのである。その位置は、簡単にいえば、Quṭb Minār (クッブ=ミナール) の南々東方に當り、いわゆる Rāī Pithaurā (ラーイー=ピタウラー) の城砦の東南隅の地域にあたる遺構に近いところである。現在では、クトゥップ地域から Gurgaon (グルガーオン) に至るバイパスを南下すると、クトゥップの塔から車



挿図1 いわゆる Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓といわれる遺跡。向つて右側の小室が、その子の Khān-i Shahid の墓室といわれている。

デリーに現存する奴隷王朝末期の墓について

で一分足らずのところの、道路の右側、約 30 メートルほどの地点に、その建造物の廢墟は立っているの、氣をつけていればすぐにわかる。その建物の現状については、のちに必要に応じてその細部にもふれるが、ここにごく簡単に記しておく。前頁に載せた寫眞（挿圖 1）でもわかるとおりに、建物の基部に、長方形のものが目立つ切石を積み重ねた層が、とくに南面の一部によくかかえるほかは、建物の上半部の大部分は、表面の石積みが、ほとんどすべて崩れ落ち、その下にあつたと思われるいわゆる碎石と漆喰とが露出している。天井は、もちろん、完全に崩壊してしまつていばかりか、地上でも、その残がい

が區別できないほどに全くの荒廢の狀況を呈しているといつてよい。ただ、その中央主室内部の隅のところどころに、戸口やニッチらしいものの上を形づくるアーチをつくりあげている石の列が露出してみられるのであるが、その石の並べ方が、部分的にはきわめてよくかかえるのである（挿圖 2 を参照）。さきにもすこしふれておいたところであるが、この建物の歴史的問點として重要な手がかりと思われるものは、主室の南面の入口の向つて右側の偽窓凹部のアーチの向つて左の下端部と、そのすぐ左上の粹



挿圖 2. いわゆる Balban の墓の内室の一隅。
アーチに注意（1954 年撮影）。

部の縁邊の一端にわずかに残つているモルタルらしきものである。それは全く黒ずんでしまつて今日でははつきりと識別しにくい、よく見ると、ともかくも文様のような彫刻ともとれるのである。ただし、それが文字碑文でないことだけはたしかなように思われる（挿圖 3 参照）。これがモルタルであれば、それが後代のものであるかまたはこの建物の建造當初のオリジナルなものであるかは大きな問點であり、もしそれがオリジナルなものであるとすれば、デリ



挿図3. いわゆる Balban の墓の南面に現存するモルタルの文様。

一の建造物におけるモルタルの技術上の歴史と関連して考究する必要がある。ともかく、この問題は、いずれより仔細に分析してみる必要がありそうである。また、この建物のプランであるが、中央の主室の東側には、アーチをもつ戸口をへだてて小さい室があつたことは、その東部の室の壁の一部が、やはり完全に崩壊しているとはいえ、なお残存している現状によつてもはつきりと知られるところである。さらに、主室の西側にも、同じような小室があつたと思

われるが、これは東側の部分よりは一層荒廢してしまつていて、推測以上の復原を許さない。しかし、その存在は疑いをいれないところであるといえよう。

インド政府の考古調査局 (A. S. I.) の寫眞部 (Photography Section) には、この建造物の推定復原平面圖なるものが今日なお保存されているが、それをみると、主室の壁の厚みはいずれも8フィート數インチで、室内は37'9"の正方形、四面の入口の幅は8'0"であり、外側の長さは54'1"。これに對して、東西は全く對稱をなす小室をもち、その室内壁面の東西のひろさは、19'9"と記されてある。⁽¹⁰⁾ ついでながら、かつてこれだけ資料をのこしていながら、現存するこの問題の遺跡に、すでにふれたように、今日、A. S. I. による文化財保護の青札がつけられていないのは、きわめて遺憾なことといわなければならない。

以上に簡単に紹介してきた遺跡が、これまで多くの學者によつて、Suljān:

Ghiyāth al-Dīn Balban の墓といわれてきたものである。本稿の問題点の一つは、この、いわゆる Balban の墓とされる建造物について、文獻資料と照合して、その信憑性を再検討してみることにある。この建造物をめぐる従來の諸説についてはのちに述べるとして、一應、右の現存の遺跡とは切りはなして、Ghiyāth al-Dīn Balban の死とその墓とに關連する文獻上の諸資料、およびそれにもとづく諸問題について、それらに對する私見をもあわせて、次に述べてみよう。

2. 墓についての文獻史料について

すでに述べたとおり、Sultān Ghiyāth al-Dīn Balban の死は、1287年の半ばごろのことであつたとされている。この時期の同時代の歴史的な記録は、一つも現存していない。第1、第2論文の奴隸王朝初期および中期の墓でしばしば引用した Minhāj al-Dīn (ミンハーजूディーン) の Ṭabaqāt-i Nāṣirī (タバカーテ=ナーサーリー) は、Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の治世第15年(658 A. H. 年)、すなわち Balban がまだこのスルターンのもとで Ulugh Khān を稱していた時代でその敘述を終えている。だから、このときから、Balban がスルターンに即位するまでの年代記的記録は、史料的には、現在、完全に空白になつているわけである。というのは、Ṭabaqāt-i Nāṣirī につづく、年代記的、あるいは史書的な性格をもつ最初の現存する記録の著者は、Ziyā' al-Dīn Baranī であり、彼はトゥグルク朝後期に完成したその著 Tārīkh-i Fīrūz Shāhī を、この Sultān Ghiyāth al-Dīn Balban の即位の年から記しはじめているのである。従つて、歴史書としては、この著作が、Balban の死について記している、時代的にももつとも近い史料といえるわけである。詩人の Amīr Khusrau (アミール=フスロー) は、Baranī よりも前の世代に屬し、'Alā' al-Dīn Khaljī (アラーウッディーン=ハルジー) についての著名な作品 Khazā'in al-Futuḥ (ハザーイーヌル=フトッフ) や、トゥグルク期初期のことを記した

Tughluq Nāmah (トゥグルク=ナーメ)などのほかに、奴隸王朝末期についても、Qilān al-S'adain (キラースッアダイン)という史詩を著わしているのである。しかし、このよく知られた詩文は、Balban の子でベンガルにいた Bughrā Khān と父 Balban とのあいだにおこつたと想定された、劇的な出会いについてのドラマティックな敘述であつて、もともと正しい意味での歴史書ではないが、ともかく Balban の晩年やその死の前後の事情については、なにも記されていないのである。従つて、本稿の観点からすれば、Baranī の著作 Tārīkh-i Firūz Shāhī が、もつと重要な文獻史料となるわけである。

その Baranī は、すでにふれたように、Balban の死亡の年月について記してはいないけれども、本稿の視点からみるとまことに貴重な記録をのこしてきているのである。それは、次に紹介するところの、Balban の死とその直後の事情について記した文章である。まず、その Tārīkh-i Firūz Shāhī の本文から関連箇所を引用しておこう。⁽¹¹⁾

و کعباد پسر بغرا خان را سلطان معز الدین خطاب کرد و بر تخت
بادشاهی شامند سلطان بلین را در آخر شب از کوشک لعل بیرون آورد
و در دار الامان برد و دخن کرد و آنچنان ضابطی و قاهری و کامگاری
که سالها بقهر و سطوت جهاداری کرده بود اسیر خاک گشت و در چهار
گز زمین مدفون شد و در آن زمان که جنازه سلطان بلین از کوشک
لعل بیرون آوردند کل ملوک و ارکان دولت خاک بر سر انداخته و پیراهن ها
پاره کرده سرها برهفت دنبال جنازه سلطان میرفتند و چون جنازه سلطان در
دار الامان فرود آوردند هنوز سلطان را بخاک نه سپرده بودند که ملک الامرا
کوتوال که بس صاحب تجربه ملکی بود باز خاک بر سر کرد

この著書については、H. M. Elliot と J. Dowson のインド史叢書にその抄譯文が載っているが、この関連部分に関しては、省略が多く、原文を完全に傳

(12)
えていない。そこで次に、私譯を載せておく。

“……And, they gave the title of Sulṭān Muʿizz al-Dīn to Kaiqbād, the son of Bughrā Khān, and made him sit on the throne of the empire. In the latter part of the night, they took ((the body of)) Sulṭān Balban out of the Kūshak-i Lʿal, and carried ((it)) into the Dār al-amān [*dar Dār al-amān burdand*], and buried ((there)) [*dafn kardand*], And, thus, a superior, mighty and powerful man who had ruled the empire for years with power and majesty became the prisoner of the soil, and was interred in the land of four *gaz*…… And, at the time when the corpse [*junāzah*'] of Sulṭān Balban was taken out of the Kūshak-i Lʿal, all the maliks and the pillars of the empire threw the soil over the heads, tore the vests and followed the corpse of the sulṭān with bare heads. And, when the body of the sulṭān was alighted at the Dār al-amān, they did not still commit the sulṭān to the earth, and so, Malik al-Umarā, the Kūtwāl who was a man of experience for state affairs threw the soil over the head again……

以上に紹介した Ziyāʾ-i Baranī の記述によると、当時の状況がしのばれるような内容をもっているが、本稿に関連ある点として、とくに次のことがらに注目したい。

- (1) Balban の死後、その遺體は、Kūshak-i Lʿal (クーシャケ = ラアル) から運び出された。
- (2) そして、その遺體は、その後 Dār al-amān (ダールッラマーン) というところに持ちこまれ、そこに埋葬された。

ここにいう Kūshak-i Lʿal とは、いわば、「くれないの宮殿」とでも譯すべき名稱の建物で、これについては稿を改めて考察するつもりである。ふつうは、

“Red Palace”と譯されており、なかには“Ruby Palace”というようなしやれた譯名をつけた人もいる。ともあれ、別の史料から判断すると、Kūshak-i L'al というのは、Sultān Balban がデリーの王城内に建てた宮廷建造物の一つであつたことはたしかである。このスルターンは、その晩年を、自ら生前に愛用していたらしいこの宮殿のなかで過し、そこで最後の息をひきとつたと思われるのである。上述の文章は、いかに Balban の一派が、その死後、彼の死を惜んだかがしのばれるような描寫である。こうした埋葬時の敘述は、當時の文獻の例としては珍らしく、貴重である。しかし、Kūshak-i L'al については、本稿ではこれ以上は問題にしないことにする。

ところで、本稿の視點に立てば、問題は、彼の遺體が埋葬されたといわれる Dār al-amān なる場所あるいは建造物にある。というのは、Baranī は、この Dār al-amān を、スルターンの遺體が移された場所としてばかりでなく、それが葬られたところであるとはつきり記しているからであり、従つて、墓を對象とする本稿の問題點に直接關係するからである。そこでまず、この Dār al-amān についての考察が必要となつてくる。しかし、これについて従來の諸説を紹介し、あるいは私見を述べるためには、その前に、それに關連あるサルタナット時代の他の文獻の記すところについて、もう少し言及しておきたい。

まず、最初にとりあげる必要のあるのは、前述の Baranī の著書の時代よりは早く、トゥグルク朝の Muḥammad (ムハンマド) の治世にデリーに滞在し、その支配に關係をもつていた Ibn Baṭṭūṭa がのこした記述である。彼は、その著名な旅行記 Riḥla (レヘラ) のなかで Balban の死とその墓について述べており、しかも、その墓を自ら訪れたといつている。そして、そのくだりに、問題の Dār al-amān なる名稱がでてくるのである。次にその内容を Defrémery-Sanguinetti のフランス語譯によつて紹介してみよう。⁽¹³⁾ なお、必要に應じて、同じ版に載つているアラビア語原文中の原語を、括弧のなかにローマ字で附しておく。

“Une de ses actions généreuses, c’est qu’il fit bâtir une maison [dār] à laquelle il donna le nom de «séjour de la sûreté» [Dār al-amn]. Tous les débiteurs qui y entraient voyaient acquitter leur dette, et quiconque s’y retirait après avoir tué une autre personne, le sultan désintéressait à sa place les amis du mort; et si c’était quelque délinquant, il donnait satisfaction à ceux qui le poursuivaient. C’est dans cette maison [dār] qu’il fut enseveli, et j’y ai visité son tombeau [qabr].”

この Ibn Battūta の記述からいえることは、次の三點である。

(1) Balban は、Dār al-amn とよばれる建物をつくつた。それは、罪を犯したものに對して、寛容、慈善と、保證、戒告などの目的をもつて設けられた施設であつた。

(2) Balban は、死後、この Dār al-amn に埋葬された。

(3) Ibn Battūta は、デリー滞在中、自ら、その墓を訪れたことがある。

このように Ibn Battūta の記述の内容は、さきに紹介した Baranī の Tārīkh-i Firūz Shāhī の記すところとほとんど矛盾するところがないばかりか、まことによく一致している。そこで、Balban の死後、その遺體は、Dār al-amān (あるいは Dār al-amn, この違いについてはのちに述べる) とよばれた場所ないしは建造物に埋葬され、結局、それが Balban の墓所となつたであろうということが、右に紹介した二つの、その内容がきわめてよく一致しているトゥグルク朝時代の文獻史料から指摘され得ると思うのである。

なお、Balban の墓といわれる遺跡の一部に、Balban の生前に死んだその長子 Muḥammad (ムハンマド)、死後に Khān-i Shāhīd (ハーンネ=シャヒード、これは「殉教したハーン」の意味であり、ふつう Martyred prince などと英譯されている) とよばれた人物が葬られているという説が一般にいわれてきた。しかし、これについては、のちにもふれるが、決定的な文獻史料は一つも

ないので、ここでは、この Balban の長子の死に関する文獻上の説明は省略することにする。

ところで、文獻上の問題として忘れられないのは、ムガル帝國初代の *Bād-shāh* (バードシャー、皇帝) であつた *Bābur* (バーブル) が、Balban の墓について、その回想録に記し、しかも自らその地を訪れたということ述べていることである。この、いわゆる *Bābur Nāmah* とよばれている文獻から、A. S. Bevridge の英譯によつて關係部分を次に引用しておく。それは 932 A. H. (1525 年 10 月 18 日—1526 年 10 月 8 日) の年の 4 月 25 日の項に出ている。

“Nextday (Wednesday, Rajab 13th) I made the circuit of Khwājah Quṭbū'd-din's tomb and visited the tombs and residences of Sl. Ghiyāshū'd-din *Balban* and Sl. 'Alāu'd-din *Khilji*, his minār and the Ḥauz-i-Shamsī, Ḥauz-i-khaṣ and the tombs and gardens of Sl. Buhlūl and Sl. Sikandar (Lūdī).....”

すなわち、これによると、*Bābur* は、*Khwājah Quṭb al-Dīn* すなわち *Shaikh Quṭb al-Dīn Bakhtiyār Kākī* (シャイフ=クトゥブッディーン=バハティヤール=カーキー)、俗稱 *Quṭb Ṣāhab* (クトゥブ=サーハブ、おクトゥブさま) のダルガーに詣でたあと、二人のスルターン、すなわち Balban と 'Alā' al-Dīn *Khaljī* の墓と「彼のミナール」などを訪ねたというのである。ここで興味あることは、以上の文章を文字通りに受けとり、「彼のミナール」というのを 'Alā' al-Dīn *Khaljī* の未完成の、いわゆる 'Alā'i Minār (アライー=ミナール) と解釋すれば、クトゥブ周囲の著名な遺跡のうちで、*Quṭb Minār* すなわちクトゥブの塔と、第1論文でくわしく考察したところの、いわゆる *Suljān Shams al-Dīn Iletmish* の墓とが、巨大なクトゥブのモスク *Qūwat al-Islām Masjid* (クワットゥル=イスラーム=マシッド) とともに記述から落ちてしまつてゐるわけである。これはいささかおかしい。おそらく「彼の塔」というのは *Quṭb Minār* のことを間違つて記したものであろう。「Balban の墓」

といわれている遺跡についても、いろいろ臆測をめぐらすことはできるが、一應この Bābur の記事をそのまま受けとつて、考えるしかない。このことは、のちに H. C. Fanshawe の意見を紹介するときに、ふたたびふれることとする。

3. Dār al-amān について

そこで、次には、問題の Dār al-amān (あるいは Dār al-amn, Dār al-amān) なる場所あるいは建造物についての考察が必要となつてくる。amān も amān も、また amn も、結局は同じ意味の語といつてよいが、私は amān, amn より、amān の方が、当時実際によばれていた発音ではないかと推測している。Ibn Battūta は長らくデリーに滞在していたとはいえ、外国人である。彼の記述の内容は必ずしも正しいとばかりはいえず、かなり誤りもある。また、ときどき固有名詞の轉寫では、大きな間違いもしてかしている。それに對して、Baranī の方はインド生まれの、いわばインド人ムスリムである。この點からも、私は Baranī の記した名を採りたいと思う。

この語は、意味からいえばどちらでもいいのであるが、實はこれと同じ名をつけられた建造物が、トゥグルク朝初期に存在していたのであり、今日までその名稱を傳えている碑文もなお現存しているのである。それは、この王朝の創始者で、初代のスルターンであつた Ghiyāth al-Dīn Tughluq Shāh (ギヤースッディーン = トゥグルク = シャー) が建てた、その子の Zafar Khān の墓であり、それは、そのなかに Tughluq Shāh 自身の墓がつくられた小型の城砦風の建造物の一隅に残つているのである。すなわち、ニューデリー東南郊の Tughluqābād (トゥグルカーバード) 遺跡の西部城砦の南方にあつて、石橋をもつてその城砦の南門の一つとつながつていところの、城砦風の特異な墓である。この城砦型墓所の西北西部分の稜堡 (バステイオン) 部を形成している八角形の内室をもつ小ドームの建造物が、この Zafar Khān の墓と推定され

るものである。その南入口の内外には歴史碑文が残されているが、そのうち、室内の碑文のなかの内側のものの終りの部分に、この場所あるいは建物を、やはり、“*Dār al-amān*”と記しているのである。右の碑文は私自身にはなかなか解讀しにくいだが、関連部分のみを引用すると、次の如くなる。

مجلس اعلیٰ این بنا خیر دار الامان را از برای خان مرحوم عمارت فرمود

この *Zafar Khān* および *Ghiyāth al-Dīn Tughluq* の墓についての歴史的
問題については、いずれ別稿でくわしく述べるはずであり、そのときに石刻三
片の問題の碑文の全文をあげるつもりであるが、右に原文を紹介した部分のみ
を英譯してみると、次のようになる。⁽¹⁵⁾

“……Majlis-i A‘alā made this auspicious building of *Dār al-amān*
constructed for the deceased *Khān*.”

これによつて、トゥグルク朝初期に、おそらく、*Ghiyāth al-Dīn* がその子の
Zafar Khān のために設けた墓所に對して、*Dār al-amān* という呼稱が用いら
れていたことは、ほぼ確實と考えてよいであろう。

さらに、この *Dār al-amān* なる名をもつ建物については、前稿第2論文で
しばしば引用したところのトゥグルク朝後期の文獻 *Futūhāt-i Firūz Shāhī* の
なかにも、関連する記述が二箇所に出てくるのである。ここでは、その原文は
略して英譯のみをあげておこう。まずその第一は、次のとおりである。⁽¹⁶⁾

(a) “In the *Dār al-amān* which is the place of repose [*mazja‘*] and
the sepulchre [*marqad*] of the masters [*makhdamān*], I had the
doors of the sandal wood made, and over the graves [*qabr*] of those
great men [*khudāwandgarān*] I had the canopy of the veils onthe
doors of the house of K‘abah raised……”

第二は, Muḥammad bin Tughluq, つまり, この Futūḥāt-i Firūz Shāhī の著者と考えられている Firūz Shāh の前のスルターンが, その治世に處刑したり片輪にしたりしたものがあり, ささまざまな犠牲者を出したので, そのあとを繼ぐものを慰撫するために, Firūz Shāh が贈りものをしたという意味の記述である。この文章によれば, その際, Firūz Shāh は, これらの犠牲者の遺族の「満足の意を示す書状」 [*khutāt-i khāshnādī* (複数)], つまり, いわば「納得状」とでもいうべき書面を箱 (*ṣandūk*) に入れて, 前帝 Muḥammad Shāh の墓石の上部におき, 神が前帝に慈悲を示されんことを祈つたというのである。ここでは原文は省略するが, 以上のなかの問題の個所だけを英譯すると次のようになる。⁽¹⁷⁾

(b) “Putting the deeds of the contentment [*khutāt-i khāshnādī*] confirmed by the authenticated witness in a chest [*ṣandūk*], I placed them in Dār al-amān, the tomb [*maqbarah*] of the deceased Sulṭān [*sulṭān-i maghfār marhūm*] towards the head.....”

これら二つの記述にうかがわれるところの, トグルク朝時代に Dār al-amān とよばれたスルターンの墓については別稿にゆずるとして, ここでは本稿に關係あることのみを述べておく。私見では, Ṣafar Khān の墓に Ghiyāth al-Dīn Tughluq の碑文がある限り, そのなかの Dār al-amān とは, 前述の八角形の墓のみならず, Tughluqābād 西城砦南面に石橋をもつてつながれているところの Ghiyāth al-Dīn Tughluq Shāh の墓のある五角形の城砦型建造物全體をいうに違いない。してみると, さきに紹介したところの Futūḥāt の記述のなかで, Firūz Shāh が自らの先帝 Muḥammad の墓である Dār al-amān といっているのも, これと同じ建造物と考えていいであろう。くわしくは別稿で扱うつもりであるが, ここでは, 一應, 右のように私見をまとめておきたい。⁽¹⁸⁾

上に述べたことを要約すれば, Futūḥāt の前掲 (a) および (b) の記述のな

かにみえる Dār al-amān とは、いずれも、Tughluq Shāh の墓をふくむ不等邊五角形の城砦墓の建物をいつたのものであると考えていいたろうということである。とすると、これまで一部の學者が考えているように、Futūhāt にでてくる (a) の記事を、Baranī が記し、Ibn Baṭṭūṭa もその名を記している Balban 建造の Dār al-amān と関係ありとすることはもちろん、それと同じ建造物であることは到底あり得ないことと考えていいであろう。このような誤まつた推論を導いた學者の例をあげれば、Elliot-Dowson の譯註を集大成した S. H. Hodivala の場合もそうであつて、この碩學は次のようにいつている。

“Sultān Firūz Tughluq also states that he had the Dāru-l-Amān of Balban repaired, as it was the bed and resting place of great men.”

すなわち、彼は、Firūz Shāh が、Balban の建てた Dār al-Amān そのものを修復させたように考えているのであり、この點で、Tughluqābād 南邊の遺跡と Balban の建造物とを混同して理解してしまつてゐるわけである。こうした混亂が、トゥグルク朝の専門家 Mahdi Husain にもあることはいささかおどろかされる點である。M. Husain は、Ibn Baṭṭūṭa の英譯の関係部分の補註で、“This is the *dar-ul-amm* mentioned by Sultān Fīroz Shāh in the *Futūhāt-i Fīroz Shāhī*,” と述べ、Futūhāt の関係部分を引用している。これは全く同じ誤謬である。⁽¹⁸⁾

以上で、私は、すでに紹介したところの Balban の Dār al-amān は、Futūhāt の文や、Tughluqābād に現存する Zafar Khān の墓の碑文にみえる、同名の建造物とは全く別のものであろうという推論について述べた。すでにこれまで数人もの學者がこれらを混同したことは明らかに誤りであり、Balban の Dār al-amān について記した史料は、すでにくわしく紹介した Ibn Baṭṭūṭa と Ziyā'i Baranī の文章のみに限定されるとしていいであろう。ただし、サルタナット時代からさらに下つてムガル朝のアクバルの時代になると、數人の歴

史家のなかに、Balban の埋葬と Dār al-amān についての記述がみられるのである。そのうちの一人で、Ṭabaqāt-i Akbarī (タバカーテ=アクバリ)の著者である Nizām al-Dīn Aḥmad (ニザームッディーン=アハマド)は、次の如く述べている⁽¹⁹⁾ (以下、ムガル朝期の史書については、英譯のみを記して、ペルシア語原文は省く)。

“……After three days, he was united to the mercy of God; and was buried [*madfūn gashṭ*] in the Dār al-amān……”

これに對して、Muntakhab al-Tawārīkh (ムンタハブ=タワーリーフ)の著者のAl-Badāūnī (アル=バダーオーニー)はなにも記していないけれども、同じ時代の Firīshṭah (フィリシタ)は、Nizām al-Dīn Aḥmad と同じようなことを述べている。そして、ここでも、“Dār al-amān”の名を記している⁽²⁰⁾のである。

ところが、ここに、有名な Akbar Nāmāh (アクバル=ナーメ)を著わした‘Abū al-Faḥl (アブール=ファズル)は、その‘Aīn-i Akbarī (アーイーネ=アクバリ)のなかで、ムガル治下の12の sūbha (スーバ)、すなわち、行政区劃でほぼ州といつていいほどの諸地域について記した部分のなかの“Dihlī” (デリー)の項のなかで、右に紹介したアクバル時代の二書とはちょっと變つた記述を加えているのであり、これが、のちにいささか混亂を招くもとなつた。そこで次にそれを紹介しておこう。都合により原文を見得なかつたので、⁽²¹⁾H. S. Jarett の譯文を載せておく。

“Sultān Ghiyāsuddin Balban erected another fort, intending it as a (royal) cemetery. He also built a handsome edifice in which if any criminal took sanctuary, he was absolved from retribution.”

しかし、さきに紹介した Ibn Battūṭa および Baranī の記述と、この‘Abū al-Faḥl の文章とを比較してみると、はるか後代の‘Abū al-Faḥl の方にはいささか考えちがいがいるように私には思われるのである。上に述べた記述のうち

の後段は、明らかに Ibn Baṭṭūṭa や Baranī が述べた内容と同じで、まさに Balban がつくつた Dār al-amān のことをいつているのにちがいない。しかし、その文章の前段を読むと、‘Abū al-Faḡl の記述をそのまま解釈すれば、Balban は別に城砦をつくり、それを墓地とする意圖をもつていたということになる。そして、その城砦には、どうやら Balban の墓がそのなかにあつたということを知っているもののように受けとれるのである。

これは、實は、ちよつとおかしいのである。私は、別に、「奴隸王朝時代のデリーの城砦について」という小稿を同意しつつあり、いずれそのなかで論じるつもりであるが、いま簡単に問題点を述べれば、ほほ次のようになる。すなわち、上に私がふれた ‘Abū al-Faḡl のいう城砦とは、本稿で、のちにふれるところの, Qilāh’i marzghan (キラエ=マルズガン) にあたるものと考えられるのである。そして、後述するように、これを“fort”といえるかどうかは問題なのである。また、‘Āin-i Akbarī の著者によれば、Balban にはこの城砦を墓地にする意圖があつたといひ、さらに別の建物を建てて、犯罪人の保護にあてたというのである。前述の Ibn Baṭṭūṭa と Ziyā’ al-Dīn Baranī の二人がすでにトゥグルク朝時代に、Balban の建てた Dār al-amān と Balban の墓についてふれ、Balban がその Dār al-amān に葬られたと記しているのであるが、‘Abū al-Faḡl は、この二人が記していることには全くふれていないのである。しかも、‘Abū al-Faḡl のいう「別の建物」とは、その犯罪人対策の目的と機能からして、まさに Baranī と Ibn Baṭṭūṭa の二人が述べている Dār al-amān と同じ施設についていつているのに相違ないことは明らかである。‘Abū al-Faḡl は、これらの先人の文章を讀んでいたことであろう。あるいは何か別の書物に據つたのかも知れないが、とにかく、この混乱は、‘Abū al-Faḡl の側の單なる誤まりか、あるいは彼が一つの同じ建物を誤つて二つの施設のように解釋してしまつて、別個に敘述しているものとも思われるのである。これについては、19世紀以降になつて、學者間にいささか混乱を招くもとなつた

ので、ここに一應ふれておいた次第である。

“Dār al-amān”とはどういう意味であるか。*dār*とは「家」「house」をいい、そして *amn*, *amān* とは、「安全」,「平和」,「平安」, “safety,” “security,” “peace”などを意味する語である。従つて, “Dār al-amān”とは、文字通りにいえば、まさに多くの人びとが譯したように, “house of safety,” “house of security,” “séjour de la sûreté” などにあたるわけである。

しかし、この名稱が墓や廟に對して用いられたことは、前述したトゥグルク朝の *Ghiyāth al-Dīn* 時代の碑文や *Tārīkh-i Firūz Shāhī* の記事からもわかる。そこでは、トゥグルク朝前期のスルターンやその子の墓廟について、明らかにこの語が用いられているのである。この名稱が一般に墓について用いられることは、たとえば H. S. Hodivala もすでに指摘しているところで、彼は, “House of rest may signify ‘grave, tomb’ in general.” と述べている。もつとも、その Hodivala も、この Balban の場合には、單にそうした「墓」という一般的な意味ではなく、「彼が生前に自己のために建てた墓廟をとくに意味するもの」⁽²²⁾であると解釋している。

ところで、Ibn Baṭṭūṭa の *Dar al-amn* を、Hodivala は, “Dāru-l Amān” と寫して、これを “Abode of Security” と譯しているが、これは、Elliot-Dow ⁽²³⁾ の抄譯がそのように譯しているのに従つたのであろう。これに對して、M. Husain の方は、その英譯本で、⁽²⁴⁾ “house of safety” としている。Elliot-Dowson ⁽²⁵⁾ では、Baranī の譯の個所では、⁽²⁶⁾ “house of rest” と譯している。このように *dār* については、みな “house” と譯しており、ウルドゥー語譯の *Rihla* もこれを “*makān*” という、同じ意味のウルドゥー語に譯している。このほか、B. De は、*Ṭabaqāt-i Akbarī* の譯で “mansion of safety, the royal cemetery” と意譯している（註19 參照）。なお、*Dār al-amn* か *Dār al-amān* かについては、私自身は *Dār al-amān* の方を採るが、それについては

すでに記したところである（前出，17ページ参照）。amn も amān も同じような意味で，二つを並べて“*amn ū amān*”といういい方があり，たとえば F. Steingas などは“*security and tranquillity*”と譯している⁽²⁷⁾。

いずれの譯語を選ぶにせよ，Dār al-amān, Dār al-amn とは，要するに，（平安のある場所）を意味する語であつて，墓廟に用いられるほかに，時には，Ibn Battūta が Balban についていうように，逃亡者や犯罪人などに對する施設のようなものにも用いられても當然であろう。ただし，Ibn Battūta をはじめ，彼の敘述に據つた後代の史書に述べられているところの，Sultān Balban によるこの施設の造營の目的については，本稿の論旨とは直接の関係はないのであるが，私自身は，いささか疑念をもつていふことをここに記しておきたい。というのは，Balban のように，その支配の貫徹のためのつよい目的をもつて法を嚴正に施行し，また同時に，一種のテロ政治を行つてスパイ網をきわめて周到に整備し，それによつて自らの君主權の高揚を強力にすすめたと考えられる⁽²⁸⁾，いわばサルタナットの専制支配の頂點にあるスルターンが，Ibn Battūta の記しているように，犯罪人に對して寛容をもつてのぞみ，彼らを保護するが如き施設を，わざわざその目的のためにつくつたとは思えないのである。かりに，Balban が Ibn Battūta のいうように Dār al-amān の美名のもとにそうした施設を，墓としてではなしに，生前につくつたとすれば，それは，こうした犯罪人保護の目的のほかには何か別の意圖があつたにちがいない。Ibn Battūta は，彼が聞いた別の施設のこと，あるいは，後代につくられた話の傳承を，Balban 自身の意圖のように記したのであるかも知れない。あるいは，もし Balban がそのような施設をつくつたものとするならば，それは，逆に，むしろ寛容に名を假りた懲罰，拘禁などの目的のためであつたかも知れない。しかし，いずれにせよ，このことは，本稿の問題とは直接關係はないので，これにとどめておくことにする。

Dār al-amān を，もし，Balban がその生前に自ら建てたとするならば，彼

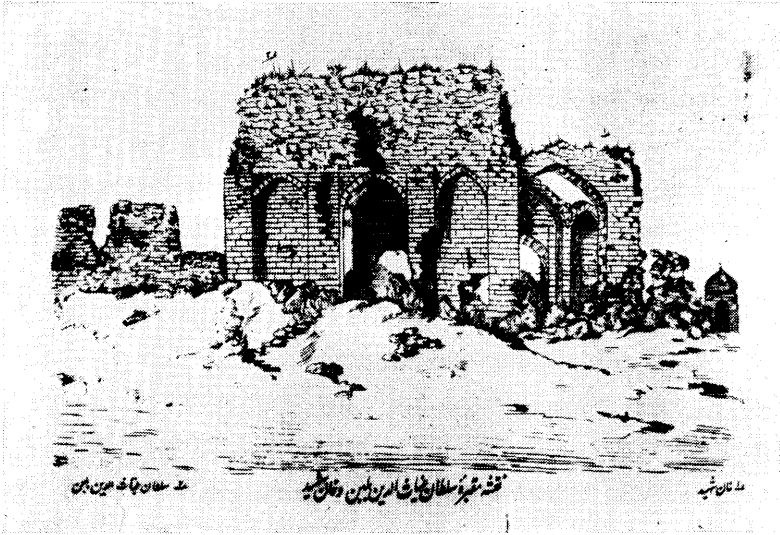
が生前から、それを死後に自分の墓所としようと考えていたかどうかという問題がある。これについては、H. S. Hodivala による、私がさきに紹介した説(23ページ参照)にもかかわらず、たしかなことはなに一つとして確證がなく、従つて正しい結論は出し難いとするのが正當であろう。支配者が生前にその墓所を造営させるということは、トルコ人やインド＝ムスリムの場合にもよくあることである。このことは、サルタナット時代の墓一般の場合にもしばしばあてはまることであるが、この Balban の場合には、なんの證據もないので、本當のところはよくわからない。さきにあげた 'Abū al-Faḡl の墓地造営についての記事(21ページ)の如きも、ずつと後代のことであるし、文章が簡単すぎてよくわからない。しかし、私は、Sulṭān Balban の場合には全く関係のない文章ではあるが、Baranī が、その Tārīkh-i Firūz Shāhī の文中に、生前に自分の墓所をつくるという慣習を肯定するような敘述をのこしていることに、⁽²⁹⁾ ついでながら、一言ふれておきたい。Balban の場合には、その死後、彼の臣下たちはその遺體を Kūshak-i L'al から運び出し、Dār al-amān に移して、そこに埋葬したという。このことは、すでに述べたように、ほぼ確實のように思えるのである。ただ、その場合にも、次のいずれかの場合が考えられるのである。すなわち、

- (1) Dār al-amān は、墓としてでなく、別の目的で建てられた建造物で、Balban 自身も自らの墓とは考えていなかった。しかし、その死後、彼の遺體は、遺族や臣下のものによつて、そこに埋葬された。
- (2) Dār al-amān は、墓以外の別の目的で生前に建てられたが、同時に、Balban 自身も、生前からそれを自らの墓所として豫定していた。
- (3) Dār al-amān は、別の目的で生前に建てられたが、Balban が、その死の直前にそこに埋葬されることを望んだので、そうなつた。
- (4) Dār al-amān は、もともと、Balban が自分の墓として(あるいは一族もふくめて)のみ建てた建造物である。

以上のうちのどれが當つているかは、現在では正しくは判断し得ないというよりほかはあるまい。ただし、(4) の場合の、生前における自己建立説は、Ibn Battūta の記しているところであるが、これとて、実際には傳聞にすぎないわけである。なお、私がここであえて「別の目的」としてすでに紹介したような「犯罪人云々」のことを記さなかつたのは、Ibn Battūta が述べているような目的のために Balban が Dār al-amān を建てたことに對する私の疑念（前述 24 ページ）によるものである。ただ、以上の四項について、あえて私の推測を述べるならば、慎重かつきわめて計画的な統治をな行なつてスルターンの専制體制を固めることに努めた Balban としては、上述の (2)、すなわち、生前に、Dār al-amān を建てさせ、それを生前になにか別の目的に用いつつ、死後、自らが埋葬される墓所に豫定していたというのが、もつともありそうなことのようにも思える。ただし、これとて、結局は、推測にすぎない。

4. 従來の諸説について

以上に、私は、Ibn Battūta, Ziyā'i Baranī の記述を中心として、Sulṭān Ghiyāth al-Dīn の死後の事情とその墓とについての問題點を、主として文獻上から説明してきた。これらの文獻に記されている、Balban が葬られたといわれる Dār al-amān、つまり彼の墓を、さきに私が本稿のはじめに紹介しておいた、クトップ地域の南南東に現存している廢墟の建造物に比定して考えてきたのが、19 世紀後半以來の諸著書の、ほぼ一致してとつてきた見解である。しかし、それらの著者の多くは、この現存の建物を、構造、様式上から考察してみたり、あるいは私が上に紹介したような文獻の内容とあわせて研究した結果として、この建物が Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓であるという結論を導いているのではない。多くの場合には、この崩壊しつつある遺跡こそが Balban の墓であるという一種の固定觀念が、これらの著者をして、従來の比定をそつくりそのままくりかえさせる結果となつているのである。



挿図4. Āthār al-Ṣanāʿid に載っている Balban の墓の挿画 (1904年, Kānpur 刊本より)。

それでは、いつたい、これまで多くの著者の比定の根據となつた文献はなんであろうか。現存の問題の遺跡を Balban と結びつけて紹介したのは誰であろうか。正しいところは私にも實はよくわからない。そこで、私は、少くとも私自身もつとも古くさかのぼることのできた Saiyid Aḥmad Khān (サイイド=アハマド=ハーン、以下、慣用に従つて Syed Ahmad Khan とする) が記すところから紹介していきたい。

19世紀中葉に近く出版された有名なウルドゥー語の著書 Āthār al-Ṣanāʿid (アーサールッ=サナーディード) の初稿本のなかで、Syed Ahmad は、「Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓 [maqbarah]」という見出しのもとに、この遺跡を、挿繪とともに紹介している。その一部を英譯してみると次の如く⁽³⁰⁾である。

“……Although it is not deserved to write a drawing now and

the history of the construction of this building [*‘imārat*] is not known from any book, the fact is that Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban died in 686 A. H. From this notion it is possible to write that Sulṭān Mu‘izz al-Dīn Kaiqbād bin Sulṭān Nāṣir al-Dīn bin Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban, who was the Bādshāh after him, constructed this building [*yē ‘imārat*], that is to say, about 577 years have passed till now.....”

Ahmad Khan は、この文章の内容から推す限りでは、私がさきに紹介した Ibn Baṭṭūṭa と Ziyā‘i Baranī 両者の記事の内容については知つていなかったかのようである。彼は、この建物の建立者が、Balban の次のスルターンの Kaiqbād であるという可能性についても述べているのである。この Kaiqbād 建立説は、私がこれまでにみた文獻史料には、なんらそれを示す根拠は全くないのである。おそらく、Ahmad Khan は、そのことを史書から引いたのではなく、先帝の墓は次のスルターンの手で建てられたのであろうという、ふつうの考え方に立つて、Kaiqbād 建立説を記したにすぎないのではないかと、私は思うのである。Balban の墓について、Syed Ahmad はさらにつづけて、その建物の一部として、主室に接續してその東側にのこつている、いわば側室ともいうべき廢墟の部分を、Balban の子で、その生前にすでに「Lāhūr (ラーホール) の方面の戦で」、「683 A. H. 年に」(Barnaī は 684 A. H. 年とする) 死んだスルターン位繼承豫定者だつた、いわゆる Khān-i Shahīd (ハーネ = ジャヒーード) の墓であると述べているのである。

ところが、この Ahmad Khan の敘述も、Āthār al-Ṣanādīd の改訂稿本になると、上に紹介した初稿本の敘述の内容は、大幅に變えられている。改稿本の敘述のなかの要點のみを英譯してあげると、ほぼ、次のようである。⁽³¹⁾

“.....When this Bādshāh died in the year of 685 A. H., i.e 1286 A. D., he was buried here. This tomb [*maqbarah*] is completely ruined

…… By the side of this very tomb there is another tomb [*qabr*], and it is known that the tomb is of Khān-i Shāhid, his son, who was killed in the battle near Lāhūr. From this, we know that this tomb was constructed in his own lifetime [*aḡnē sāmnē*], and when he (Balban) died, he was also buried here.”

つまり、Ahmad Khan は、初稿本では、この問題の建物が後継者 Kaiqbād によつて建てられたものであると推定しているのであるが、その改稿本では、Balban 自身が、その生前に、戦死した子のために傍らの墓をつくつたのだから、この墓の建物そのものも、Balban の存命中につくられたものであり、このスルターン自身、死後、そこに埋葬されたのだという考え方に變つてきているのである。Ahmad Khan は、その改稿本では、しばしば依據した原典を註記しているのであるが、この場合は、Baranī も Ibn Baṭṭūṭa もあげていないので、その考察の基礎が、私がさきに紹介した文獻史料にあるのか、あるいは別に推定すべき根拠があつたのか、よくわからない。

Ahmad Khan は、改稿本では、隨所に Baranī を引用しているのであるから、私がさきに紹介した Baranī の Balban 埋葬や Dār al-amān についての記述は、おそらく知つていたのではないかと思う。しかし、その Balban の記述を、どこまで、この現存の遺跡と結びつけて慎重に考えあわせていたかとなると、その點はかなり疑わしい。というのは、次のことによるものである。すなわち、同じ改稿本の第1部 (Bāb Awwal) のなかの、デリーの城市の變遷の歴史について述べている部分で、彼は、Balban が造營したといわれている城砦 (Qil'ah) として、俗稱 Qil'ah-i marzghan (キラエ = マルズガン) とよばれた建造物について記している。Syed Ahmad は、それについて述べる際に、Khulāṣath al-Tawārīkh (フラーサットゥル = タワーリーフ) および “Ā'in-i Akbarī” の二書を註に記しつつ、「Sultān Ghiyāth al-Dīn の治世には、この Qil'ah にその身を隠した犯罪人は、捕えられることがなかつたと

いう慣習があつた」⁽³³⁾と述べているのである。Ahmad Khan のこの記述の資料となつたのは、私がさきに紹介した ‘Āin-i Akbarī の記事であることは明らかであり、17世紀の末葉、ムガル第6代皇帝の時代の史書 *Khulāṣath al-Ta-wārikh* の記事もまた、この“marzghan”とよばれた城砦にふれているわけである。⁽³⁴⁾つまり、Ahmad Khan は、改稿本においてさえ、Balban の墓と関連して *Dār al-amān* については一言もふれていないのにもかかわらず、Balban が造營したとしている城砦についての説明の場合には、あきらかに *Dār al-amān* といわれていた建造物についての内容と同じ機能について記していることが指摘できるのである。私見では、Ahmad Khan は、Baranī や Ibn Battūta を讀んだにもかかわらず、Balban の墓の敘述のときには、それについて忘れるか、あるいは落したのであろうと考えるのである。

この、いわゆる *Qil’ah-i Marzghan* のことは、上にふれた Syed Ahmad の敘述以後にも、彼に據ることの多い Carr Stephen もとりあげており、ちよつとややこしい問題になつてくるのである。とくに、それは、*Ghiyāth al-Dīn Balban* の名と関係あると思われる *Ghiyāthpūr* (ギヤースプール) とよばれたデリーの地名との関連もあり、話はこみ入つてくるのである。くわしいことは、別に、デリーの城砦について述べる機会に言及したいと思う。ただ、さしあたって本稿で問題となるのは、この Syed Ahmad の *Āḥār* のなかでの考察は、彼が紹介した *Qil’ah-i Marzghan* といわれる建造物の説明の内容に、Balban が建てたと伝えられる *Dār al-amān* と事実上同じと考えられる敘述をしながら、その *Qil’ah* と Balban の墓との兩者を全く別のものと考えているらしい點である。すなわち、Ahmad Khan は、この「城砦」については、*Ghiyāthpūr* にあつたと考えているのであり、しかもその *Ghiyāthpūr* なる地を、現在、*Nizām al-Dīn Auliya* (ニザームッディーン=オーリヤー) の墓のある今日のニューデリーの *Nizamuddin West* 地区の附近と考えているのである。一方、彼は、Balban の墓としては、すでに述べたとおり、クトゥブ

南方の問題の遺跡を紹介しているのである。このことから、Syed Ahmad が、この二つの建造物の関係をはつきりと區別しないままに、あいまいに記したことが、あきらかに推測できるのである。

そこで、以上に述べてきたことを少し整理してみると、大體、次のようになる。すなわち、Ahmad Khan は、まず、おそらくは、それまでの傳承にもとづいて、クトゥブ南方地域の問題の廢墟の遺跡を、Balban およびその子の墓として説明した。彼は、それを、はじめに、Kaiqbād が建てたものと常識的に説明したが、改稿に際しては、Khān-i Shahīd の戦死の事實から Balban 自らが生前に建立したという風に、その説明を變えたのである。そして、その一方では、サルタナット時代の他の文獻が明らかにその存在について記しているところの Dār al-amān なる施設と同じ目的と機能とをもつた建造物を、「城砦」(Qil'ah) とよばれた俗稱のもとに、その存在を推定し、それを Balban の稱號である Ghiyāth al-Dīn と結びつけて、サルタナット時代の地名である Ghiyāthpūr、すなわち現在の Nizamuddin West のあたりに、別に、その存在を想定したわけである。この Qil'ah-i Marzghan については、Syed Ahmad は、別にその初稿本でもすでにふれているのであるが、⁽³⁵⁾そこでは彼は、“Sarz Ghan”と記している。

さて、インドにはじめて、組織的な考古學的調査を導入した A. Cunningham の考えを紹介してみよう。1862—63 年度の A. S. I. の報告書で、Cunningham は、Ahmad Khan が述べているところの、さきにもふれた Qil'ah-i Marzghan と、Ibn Battūta の “Dār-al-aman” (Cunningham の綴り) とを結びつけて考えている。そして、Ibn Battūta の敘述を引用して、Balban の墓は Dār-al-aman のなかにあつた⁽³⁵⁾ということを記しているのである。彼は、marzghan については、「これまで、Kila すなわち fort という名にあまりにも大きな重要性をおきすぎてきた」きらいがあるとして、結局、「その建物は、壁を廻らせたふつうの圍壁 (enclosure) であつて、おそらくは、Tughluk Shah

の墓を囲んでいるところのものとからべてそれほど大きいものとは思われない」ほどの建造物というふうに考えている。そして、それは、「城砦とか、大きな城市とかいうものではなく、ただ、彼の (Balban の) 墓を囲んでいるところの一つの小さい圍壁であり、それが同時に、債務者や犯罪人のための逃避場 (asylum) たり得るくらいの大きさをもつ場所だったのである」と結論している。

しかし、おかしいことには、A. Cunningham は、Ibn Battūta を引用して、墓と Dār-al-aman とを同一場所と考え、しかも一方では、Syed Ahmad を読んでいながら、Balban の墓といわれるクトゥブ南方に現存する問題の廢墟については、一言もふれていないのである。これはどういうことなのであろうか。彼は、Syed Ahmad がその所在まで述べている問題の遺跡について、彼の文獻上の所論と結びつけてはいないのである。そして、Tughluq Shāh の墓を囲む城砦との比較などについて記して、あたかも假定の話のように論じているのである。だからといって、彼は、問題の廢墟の遺跡の比定を拒否しているのでもなく、またそうした比定に對して慎重に構えているのでもないようである。おそらくは、Cunningham の關心は、デリーの城砦の歴史的變遷にあまりにもつよくおかれすぎていたので、Syed Ahmad がその場所まではつきり傳えている問題の遺跡との關連を忘れてしまつたものと、私は推察するのである。これを要するに、Cunningham は、Ahmad Khan の Qil'ah-i Marzghan と Ibn Battūta の Dār al-amān とを結びつけて考えながら、それを、同じ Syed Ahmad が紹介した、クトゥブ地域南方に現存する、いわゆる Balban の墓の遺跡と結びつけては考察していないのである。

Cunningham のすぐあとに、ベンガル=アジア協會の機關誌に寄稿した J. D. Tremlett は、“Tomb of Ghiasud-din Balban”の項で、「Qutb 地域で、Jamāli Kamāli のそれとして知られているモスクのすぐ向うに」廢墟として存在する墓を、Ibn Battūta の記録とむすびつけて、Balban の墓として紹介

している。そして、Tremlett も、Syed Ahmad Khan は、「おそらく、このアラブ旅行者によつて書かれた、ほとんど同時代の敘述を知らずに」、Dār-al-amān と Balban の墓とを別の場所に考えてしまつたとして彼を批判している。

J. D. Tremlett による、いわゆる Balban の墓についてのディスクリプションは、1860年代末期の状況を示しているものと考えられるのであるが、問題の遺跡の現在の状態とはかなり異なる点がある。そこで、次に、彼の敘述のなから、問題になる点を挙げてみよう。

- (a) それは、小さな圍地 (yard) のなかにあり、低い壁 (a low wall) に圍まれているが、その壁にはアーチ型の小窓の列が開かれている (pierced by a row of arched openings)。
- (b) (この圍壁の) 北の入口へは、二段の階段を上がるのであるが、その下に一つの穴 (an aperture) があつて、そこから水がパイプを通つて流れ出ていたらしく思われる。
- (c) 「墓自體は、石造りの四角型であるが、プラスターで蔽われ、色彩が施されている (painted)。」
- (d) 「四隅は、外側で六つのリセス (six sided recess) が切られ、やがて頂部で圓周をつくつている」
- (e) 「内部の東方および西方の入口の上には、アラビア文字の碑文がある。」
- (f) 墓 (grave) の痕跡はないが、崩れたドームの大きな破片があり、それはドームが、最近、落ちたことをおもわせる。
- (g) キブラガー (qiblahgah) が、中庭の壁につくられているが、その部分の高さは、壁の他の部分の倍の高さである。⁽³⁷⁾

さて、Tremlett が書いた、これらのディスクリプションを讀んだとき、私は、最初、Tremlett の觀察よりも早く、19世紀のなかごろの Ahmad Khan の著書 *Āthār al-Ṣanādīd* に載つている、なかば崩壊した遺跡の挿畫 (27ページの挿圖4を参照) と、私自身がここ數年間に二度ばかり見た遺跡の現状とを



挿図5. Jamāli Kamāli Masjid 南方のムガル時代に属すると思われる墓、およびその西側の壁。

想いおこしながら、この Tremlett のかなり詳細な報告を、全く貴重なものと思つたのである。とくに、彩色および碑文の痕跡の残存についての敘述には、むしろ驚いて私の観察の至らなさを恥じたのであつた。しかし、その後、私の遺跡調査ノートを調べ直しているうちに、これについての疑問が私の頭に生じてきた。それは、Tremlett の敘述は、問題の Balban の墓といわれる遺跡ではなく、全く別の建造物について、誤まつて述べたものではないかという疑念である。というのは、私が紹介した Tremlett による記述内容の特徴とかなり似ている構造と様式とをもつ別の遺跡が、まさに、彼自身が記しているように「Jamāli Kamāli Mosque のすぐ向う」、すなわち約 100 メートルほど南方に存在することに、思い至つたからである。それは、A. S. I. による Delhi Monuments List では第Ⅲ巻に収録されているもので、Daud Sarai (ダウド=サライ) の地区のなかの、“Tomb (Unknown)” として載せられている遺跡である⁽³⁸⁾。同報告書では、時代区分は、“Afghan” と記されているが、私自身の観察では、この建造物は、どうみても、明らかにムガル時代の特徴をもっている

墓であり、A. S. I. の報告書の時代区分の考證は、どう考えても不適當のように思われるのである。しかも、ここで問題となるのは、この遺跡の特徴が、すでに上に紹介した J. D. Tremlett による Balban の墓についてのディスクリプションの内容とよく合うところがある点である。

ここに念のため、私が 1960 年はじめに撮影した寫眞を一葉載せておくが(挿圖 5)、Delhi Monuments List では、その No. 149 にあげている問題の墓については、「Jamali Mosque の南方約 300 ヤード」としている。その (j) 項の敘述はかなりくわしいので、私の野帖の貧弱な内容よりも、むしろその敘述のなかから要點のみを引用しよう。(引用文中のローマ数字は筆者。なお、私が觀察した當時は、問題の Tremlett の報告に接していなかつたので、その敘述の細部を現地で調べなかつたことは残念だが、なお他日、若干の補整をしたい。)

“The tomb (i) stands in a ruined enclosure surrounded by a pierced enclosing wall.....and (ii) is constructed of rubble masonry and plaster,..... (iii) The dome which originally crowned the building has disappeared, and (iv) the four walls, each broken by an arched entrance, are also in dilapidated condition. (v) Inside over these arched entrances are oblong havelis inscribed with Quranic inscriptions.....”

なお、このほかに、List は、“uninscribed grave” がなかにあるといっているが、私の觀察では、碎石のかたまりが蔽つていて、墓石についてはよくわからなかつた。

この、私がムガル時代に屬するとみた墓の特徴は、さきに紹介した J. D. Tremlett の敘述とくらべてみると、奇妙にも、その間に、似ている點、あるいは同じ特徴さえ指摘できるのである。すなわち、Tremlett の敘述のうちの (a) の内容は、Delhi Monuments List の方の (i) と全く同じである。Trem-

lett の (c) は、List の (ii) に述べられている点を含んでおり、またその (e) は、List の (v) に相当するといえよう。しかも、(c) の色彩についていえば、私自身も、このムガル時代と思われる墓には、たしかに残っていたことをよく記憶している。さらに、Tremlett のいう (g) のキブラガーの高さの点は、本稿に掲げた、私の撮影の寫眞（挿圖5）をみればまさに一目瞭然であろう。(f) の墓についての問題や、(d) の四角から圓に移る構造やリセスなどの点も、私の観察とかなり合っているのである。

これを要するに、私の考えでは、J. D. Tremlett は、Ahmad Khan を讀んではいず、従つて、Āthār の挿畫もみていなかったのではないであろうか。そして、同じような地域にある、問題のムガル時代の遺跡を、おそらくは案内人の誤まつた説明のまま、Balban の墓として記したのではないであろうか。私の説明はいささか長きに失したようであるが、かなりくわしいディスクリプションをふくむ 19 世紀後半の貴重な記述だけに、私見を記して大方の意見を仰ぐ次第である。

次は、Carr Stephen (1876 年刊) の記述であるが、彼は問題を少しく擴大している。すなわち、Balban の遺體を運び出したと Baranī が記している Kūshak-i L'al をもち出して、“Kushak Lal or Qil'ah Marzghan, or Dar-al-aman and the Tomb of Balban” なる見出しのもとに、ほぼ 3 ページにわたつてその考察を述べている。Carr Stephen は、Kushak Lal は、當時のいわゆるオールド=デリーとして知られていた Rāi Pithora の城市のなかにあり、さらに Balban の墓もその城市のなかにあつたと述べている。Marzghan については、Syed Ahmad の考察にもかかわらず Qil'ah と誤つて呼ばれたと考えている。これは、Cunningham の考察をほぼ踏襲しているわけであつて、Carr Stephen も、問題の Dār-al-amān と Marzghan とを同じ場所にあるとみているわけである。

Carr Stephen は「Qutb Minar より數分歩いたところにある」Balban の

墓のディスクリプションについては、かなりくわしく述べているのである。彼の著書は現在でも相當の影響力があり、またさきの Tremlett の敘述に對する私の見解とも關連するもので、ここにすこしくわしくとりあげておきたい。彼の述べるところを要約すると、ほぼ、次のとおりである。

- (1) 遺跡は、低くて小さいアーチ型の開きをもつ、石の圍壁のなかにあり、荒廢している。
- (2) この圍壁から少し離れたところに大きい圍壁があり、それは sarai (サライ) の如くである。(これを、Carr Stephen は、Dár-al-aman と考えている。)
- (3) 墓に残つているのは、むき出しの四壁 (four bare walls) で、石の表面はとりのぞかれ、壁そのものは、9フィートの厚みの、荒い切り石とモルタルとを積み重ねたものである。
- (4) その大きさは、Altamsh の墓の約2倍。
- (5) この建物のドームが落ちたのは、それほど前のことではなく (not very long ago)、墓 (grave) のうえにはその破片がなご散在している。石造の墓棺 (sarcophagus) は、近隣の村人たちに運び出されたが、墓の痕跡はなお明らかである。
- (6) 四つの入口があり、その西と南に向つた入口は、他の側のそれよりは小さい。
- (7) 東方と西方への入口には、碑文が残存しているが、現在、それらはほとんど讀みとることが不可能である。
- (8) 墓の外面の四隅には、リセスがある。四角の壁は、上の八角形を支えており、さらにその上に、かつてドームが存在した。
- (9) この墓のとなりに、ドームのない部屋の壁がのこつている。(Syed Ahmad はこれを Balban の子の墓と考えたわけだが、Carr Stephen はこれを門 (gateway) と考えている。たゞし、墓はないが、かつて墓のよ

うでもあつたと、結局は、曖昧なことを記している。)

(10) この墓への東方の入口は、アーチ形の門 (gateway) で、崩れかけてはいるが、このアーチの内面は、彩色の名残りがあつた。墓の北壁には入口がない。南壁の入口は、Balban の墓に通じている。西方の入口は現存する。東方に面する主入口にくらべると、西と南側の入口のほうがずっと小さい。

(11) この建物のある小さい圍壁は、なお、ところどころに見える小さい石造アーチの入口と同じである。大きい方の圍壁 (すなわち、Carr Stephen が Dár-al-aman と考えたもの) は、やはり辿ることはできるが、それほど多く残つてはいない。

さて、Carr Stephen の述べているディスクリプションの要点をかなりくわしく紹介したのは、實は、上に記した 11 項目のうちの内容の大半が、いわゆる Balban の遺跡の今日の状態と、あまりにも合わなさすぎる点があるからである。一方、Ahmad Khan は、すでに 19 世紀のなかばに本稿にも轉載したような挿畫 (本稿挿畫 4) とともに、簡単ながらこの建物の特徴について敘述しているのであるが、今それをみると、今日の現状と大差ないようにおもえるのである。そこで、Carr Stephen の記述をよく検討してみると、上に要約した 11 項目のうちで、(3)、(4)、(9)、などは、問題の Balban の墓とされる遺跡の現状とよく合致するのである。しかし、(1)、(6)、(7)、(8)、(10)、(11) となると、その内容は、私たちのみる現状とは合わないところが多い。そして残りの (2) はきわめて曖昧な表現であり、(5) に至つては、全くの推測にもとづいた記述にすぎないのである。

ところで、以上の点について、すでに紹介した J. D. Tremlett の記述とくらべてみると、Carr Stephen の (1) は、Tremlett の (a) とほぼ同じである。色彩の残存についての (10) は、場所こそ若干異なるようだが、(c) と似ている。(8) は (d) に、そして (5) は (f) にほぼ同じであるといつてよい。碑

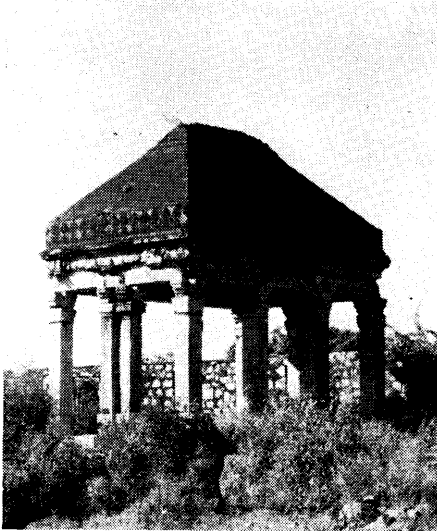
文の残存しているということと、それが読みとれるほど明瞭でないという点は、Tremlett の述べる (e) の内容と同じである。さらに、Carr Stephen の敘述の一部は、さきに私がムガル時代の墓として紹介した A. S. I. の Delhi Monuments List 所載の Vol. III, No. 146 の遺跡についての既述のディスクリプションの内容とも似ているのである。例えば、(1), (a), (i) の場合や (7), (b), (v), などの場合である。

すでに私は、Tremlett が、「Jamali mosque のすぐ向う」にある Balban の墓は、實は、そのモスクの約 100 メートル南方にあるムガル時代と思われる墓の遺跡ではないかという、私自身の疑問について述べてきた。しかし、Carr Stephen が、Tremlett のように、ムガル時代の建物の遺跡と奴隸王朝時代の創建の建造物とを混同するであろうということは、ちよつと考えられないことである。しかし、以上にいきゝかながながと記してきた両者の記述にみられる類似点と、さらに Carr Stephen がつねに Ahmad Khan と A. Cunningham の両者に據るところが多いという点とを考え合わせると、私は、次のように推測してみたいのである。すなわち、Carr Stephen の記述は、少なくともこの Balban の墓といわれる遺跡の敘述に關する限りは、J. D. Tremlett の報告を讀んだ上で、Ahmad Khan の敘述と、その挿畫の印象とをあわせて、自らの實際に現地調査観察した結果としての敘述ではなしにさきのようなディスクリプション⁽⁴⁰⁾を書き上げたのではないかという疑いである。さきに簡単にふれた Marzghan と Dār al-amān についての Carr Stephen の記述も、ほど Cunningham の説に従っているのであるが、彼は別にそのことについては少しもふれていないのである。

Tremlett の敘述はもちろん、デリーの遺跡について今日なおよく引かれる Carr Stephen の記述にも、問題の Balban の遺跡に關する限り、ともかく、現状と矛盾するところが多すぎるのである。とくに碑文と色彩についての點でそうである。そこで私は、すでに記したように、ムガル時代の遺跡との混同が

みられるのではないかという疑念を表明したわけである。

この疑念には、實はそれを補足するかも知れないと思われることがさらにある。Balban の墓とされてきた問題の廢墟の遺跡の東側に接した小室が、Balban の子の Khān-i Shahīd の墓といわれてきたことはすでに述べておいた。(28ページ参照)。それに對して、興味あることは、私が右に紹介したムガル



挿圖 6. 挿圖 5 の遺跡の東側圍壁のすぐ外側にある建造物。

時代と思われる墓の遺跡のすぐ東にも、その圍壁の外側に、それとほとんど接するが如くに現存している矩形 12 本柱の小さい建造物があり、それが、地方的には「Khān-i Shahīd の墓」という風(41)に呼ばれていたらしい事實があるのである(挿圖6)。こゝではくわしくは述べないが、このことは、Balban とその子の Khān-i Shahīd の墓との關係が、このムガル時代と思われる二つの墓についても、あるいは考えられていたのかも知れないという疑いを抱かせる

ものがある。もちろん、Khān-i Shahīd という名は、よく用いられたものであつて、この場合も、その例の一つかも知れない。しかし、それにしてはよく符合しすぎるのである。けだし、この傳承から推測すると、ある時期に、一部の人びとには、問題のムガル時代の墓と、その東側に接する矩形の墓が、それぞれ、Sulṭān Balban およびその子の Khān-i Shahīd の墓と考えられていたことがあつたのかも知れない。そして、この矩形小墓の名が、あとまで、その傳えのまゝに残されたと考えられないこともない。さらに推測をめぐらせば、

J. D. Tremlett の敘述も、あるいは、こうした地方的な傳承に従った案内のために生れたものかも知れない。

1884年刊行の、史跡保存のための報告書の「デリー」の部のなかで、H. H. Cole は、Balban の墓を、彼の分類のなかで“Ghori Pathan”時代の末期の建造物としてあげており、1281年の建立とし、“Kila Rai Pithora”のなかにあるとしている。⁽⁴²⁾

20世紀に入ってから、デリーの“Past and Present”について興味ある書物を著わした H. C. Fanshawe は、Timūr (ティームール)と同じように、デリーに入ってから同地の遺跡を訪ずれたムガル時代の Bādshāh (バードシャー、皇帝)である Bābur の記録をひいて、このムガル帝が“the tomb and palaces of Gheias-ud-din Balban”の墓を自ら訪れたことにふれる。そして、現存のいわゆる Balban の墓とされる遺跡についてふれ、両側にある部屋が Dar-al-aman (彼は“Heaven of Refuge”という譯を用いている)に當ると、Ibn Battūta の文章とむすびつけている。また、Syed Ahmad と同じように、Balban の死の「わずか2年前に埋葬された」その子の Sher Khan, Khan-i Shahid のことにもふれている。彼の敘述は、簡単ではあるが要を得ている。⁽⁴³⁾

Fanshawe はその補註のなかで、Bābur の記述(前述16ページ参照)にふれているが、そのなかで、ムガルの初代皇帝が自ら訪ずれたと述べている Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓とは、おそらく、“Shams-ud-din Altamsh の墓(すなわち、私が第1論文でくわしく紹介したところの、クトップ=モスク西北隅の、いわゆる Sulṭān Shams al-Dīn Iletmish の墓)のことに違いないとしている。Fanshawe は、その理由として、おそらくは、「皇帝はあやまつた報告を受けたか、あるいは忘れてしまつた」にちがいないと推測している。1526年、つまり Bābur が問題の墓をみたとき、もし Balban の墓が完全(complete)であつたとしたら、「現在それがある如くに全くの廢墟となつてしまつているのは、ほとんどあり得べからざること」と思えるからだと、

Fanshawe はいうのである。このことは、Fanshawe の質感をほうふつとさせていて面白いけれども、いさゝか考えすぎといつていゝだろう。Bābur は、Balban の墓をふくむデリーのさまざまな遺跡と建造物をみて廻つたことを述べているのであつて、彼が記録にとゞめた建造物のすべてが、Fanshawe のいうように、Bābur の時代に“complete”でなかつたとしてもさしつかえないわけである。まして、Bābur は、Balban の墓が完全であつたなどとは一言もいつていないのである。Bābur の記事にみえる「Balban の墓」について疑問をさしはさむとするならば、それは、のちに私もちよつとふれるように、もつと別の面から出されるべきであろう。また、Fanshawe が、Balban の墓とされる建物の両側の“a spacious room”を Dār-al-amān と考えているのは、廣さからいつていさゝかせますぎるし、當を得ていないと思う。この名稱は、建造物ないしは場所全體に適用されるべき名稱である。なお、Fanshawe より少し遅れて、デリーの都市の變遷について興味ある著述を企てた G. R. Hearn⁽⁴⁵⁾も、この墓に簡単にふれているが、別にこゝに特筆すべき記述はなにもない。

デリーの遺跡と歴史とについて、1910年代の後半にウルドゥー語のくわしい著書を刊行した Bashīr al-Dīn Aḥmad は、この Balban の墓に關しても、他の遺跡と同じく、ほゞ、Carr Stephen の記述によつており、ところどころ、Syed Ahmad Khān の Āthār al-Ṣanādīd の敘述で補つている。問題の墓については別に異見はないので、こゝに紹介する必要はあるまい。ただ、Bashīr al-Dīn の場合には、年代がところどころ間違つている。⁽⁴⁶⁾

Bashīr al-Dīn の著書とほゞ時を同じくして刊行された A. S. I. の調査報告書 (Delli Monuments List) では、この墓について、Jamali Mosque の東方約 300 ヤードとはつきりその位置まで記し、その建造物の測量値をもふくむ簡単なディスクリプションとあわせて、一應の歴史的背景についての説明を載せている。⁽⁴⁷⁾ また、さきにも述べた東方の荒廢した小室を Balban の子の Khān-i Shāhīd の墓とする傳承についても記している。この報告書にみえる敘述は、

問題の遺跡の現状ともほとんど一致している。歴史的背景については、Ziyāʾ-i Baranī と Ibn Battūṭa とを引用しているが、格別の異見は述べてはいない。

その後、現在に至るまで、Henry Sharp⁽⁴⁸⁾、John Marshall⁽⁴⁹⁾、Percy Brown⁽⁵⁰⁾ などが、この遺跡について記すところがあり、またさまざまな歴史家もそれにふれているが、本稿の観点からいつて特別の説をなしているものはないようである⁽⁵¹⁾。また、1964年1月の国際東洋学会議に際して、A. S. I. が参加者に配布したデリーの遺跡についての Y. D. Sharma 編の小冊子もこの遺跡にふれている。そこでは、J. Marshall, P. Brown と同じく、「まことのアーチ」(true arch) の使用がうかがえる点で、インド=イスラームの建築の発展上重要な位置を占めるものとして、この建造物が紹介されている。しかし、その文章の表現はちよつと慎重で、断定的ではなく、「傳承によつて信じられている」といういい方をしている。同書には、Balban の子の Muḥammad, すなわち Khān Shahīd の墓についての傳承を、東寄りの小室に認めているが、同時に、私もすでに述べたように、南方わずかの距離にある、やはり Khān Shahīd として知られている墓についてふれているのは、他著にみられない慎重な配慮といつていいであろう⁽⁵²⁾。

III. むすび、および若干の私見

1. むすび

上に述べた John Marshall, Percy Brown 以来、クトゥブ南方の、いわゆる Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban の墓は、サルタナット初期の建築技術史の上でもつとも重要な問題点をもつものとして説明されてきた⁽⁵²⁾。このことは、この現存の遺跡の歴史的背景の考證とそれにもとづく結論とが大きな重要性をも

つものであることを意味しており、きわめて大きな責任を歴史家に問いかけているものと、私は考えている。遺跡の時代の比定について、文獻史料と傳承から考察すべき歴史家が、それについて正當な努力をなさずに、かえつて、考古學、建築史學の分野の人びとが述べた、かなり曖昧な説をそのまま受けいれ、眞に歴史的な考察を企てていないのは、私にはきわめて遺憾である。

ところで、この建物が、サルタナットの歴史、とくに技術史、建築史のうえで、何故、それほど的重要性をもつて考えられるに至つたかについて、簡単に述べておく必要があると思う。それは、もしこれが Balban の墓であるとすれば、あるいはまた、少くとも、奴隸王朝末期の建造物であるということがわかれば、インドの建築技術史のうえで、はじめてキー＝ストーンを用いたところの、いわゆる“true arch”が使われだした時期を明確にし得る貴重な遺跡となるからである。さらに、石積みの點、モルタルの問題、あるいはプランの問題などにおいても、さまざまな新しい建築技術史の展開をあとづける問題點を指摘できるのである。そしてこのことは、單なるアーチとかその他の技術面での限られた問題だけにとどまらず、インドにおけるムスリム支配の確立と、イスラーム文化の導入というひろい歴史的背景のなかでとらえるときには、より大きな問題に連なる、きわめて興味ある資料となり得る性格のものだからである。

しかし、この建造物が、このような重要な問題點に連なり得るのも、それが、これまでの通説のように Sulṭān Ghiyāth al-Din Balban の墓であるか、あるいは少くとも、奴隸王朝に屬するものであるかどうかという時代區分の一應の目安がついてのちの問題なのである。たしかに、Percy Brown もいつているように、大事なことは「この建物がなんであるかではなくして、それがなにを意味するか」である。⁽⁵²⁾それがなんであるかということは、單にその建物が Dār al-amān か、墓か、あるいは如何なる建造物か、というようなことではない。それが Dār al-amān であろうが、または Balban の墓であろうが、それは、

すでに述べた建造物の大きな歴史的意味のまえには、たしかに、それほど問題ではないであろう。しかし、Percy Brown の指摘する「意味するもの」が眞の「意味」をもち得るのは、くり返しいうように、この建造物のクロノロジカルな問題、さしあつては通説のように「Balban の墓」であるか否かということの解明が、まず、缺くべからざる前提なのである。それをさしおいて、あるいは、その點をなおざりにして、建築史や技術史上の變革を云々する従來の一部の學者の所説は、あきらかに安易な、嚴密にいえば、誤まつた態度というべきであり、本末顛倒しているきらいがないでもない。

そこで私は、本稿では、いささか煩雜にわたるのを知りつつも、Dār al-amān はもちろん、Qil'ah-i Marzghan の問題にまで立ち入り、くわしく文獻上の問題點にいつての考察を企てたのである。しかしながら、残念ながら、その結果は、文獻上で問題とした Balban の墓と、現存する、いわゆる Balban の墓といわれる遺跡とは、その存在が、いわば、それぞれ並行したままであつて、この内容を決定的にむすびつける決め手は、嚴密にいえば、一つもないことがほぼ明らかになつたのである。すなわち、私の歴史的考察の結果は、19世紀に Ahmad Khan が紹介した、現存の、問題の遺跡を Balban の墓に比定することは、おそらくは、Syed Ahmad の時代にすでに存在していた傳承に據る以外は、決定的な歴史上の資料も、根據も正當にはなんら認められないということである。従つて、もちろん、東側の小室をその子の Muḥammad すなわち Khān-i Shabīd の墓所とすることも、一般の傳承以外に、なんらこれを支える積極的な資料は一つもないということも、同時にいえるわけである。もともと、この Khān-i Shabīd の墓の比定の根據は、Balban の墓とされる建造物の存在する小室が、その子の墓室にふさわしいという常識的推論以外のなにものでもないと思われる。

従つて、すでに述べた技術史上の變革というこの建物をめぐる重要な問題點についても、結論は明確である。すなわち、くりかえし述べたように、現存す

る問題の墓が、Balban の墓であるという傳承にもとづく比定を認めるという前提のもとではじめて承認し得る仮設にすぎないわけである。とすれば、この問題の遺跡を Balban の墓とする比定のためののこされた方法とは、問題の遺跡の構造と様式について、また、とくにその建造物の構成資材についての、それぞれ詳細な分析と比較研究による考察である。その方法を採用する研究の結果は、問題の建物が、*Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban* の墓であるかどうかという積極的な結論を導き出すことには依然としてなり得ないにしても、それは、少くともこの建造物が、奴隸王朝後期に屬する建造物であるかどうかということについては、ある程度までは結論がだせるはずである。それが一應判明すれば、それはさきの文獻上の史料とあわせて、傳承の信憑性について、それを判断する、歴史的な根據たり得ると思うのである。同時に、それは、少くとも、くりかえし述べた技術上の問題点を積極的に承認する大きな根據たり得ることも間違いないところといえよう。しかし、この方法は、一定の手続きさえふめば科學的には、あきらかに可能である。第1論文の「序文」にも述べたとおり、私の當面の考察は、以上のように文獻上の範圍にとどまるが、右の科學的方法がこの遺跡に適用されれば、今回の、私の限られた方法にのみもとづく考察も、はじめて本來の意圖を達成する一助となり得るであろう。

2. 若干の補足的私見

以上で、本稿における私の主な考察はおわつたわけであるが、*Sulṭān Ghiyāth al-Dīn Balban* の遺跡をめぐる二三の問題点について、若干、私の推論を補足しておきたい。

(1) 第一は、Balban の墓とその生前に死んだ *Muḥammad* すなわち *Khān-i Shahīd* の墓とされる兩者の遺跡の関係である。すでに本文で述べたとおり、Balban の墓といわれる問題の遺跡の東側の小室が、Balban の子の墓と

考えられたのは、傳承としてもきわめてありそうなことであつた。しかし、J. D. Tremlett と、おそらくは彼の報告をちよつと借用したと思われる Carr Stephen とが、Jamāli Kamāli Masjid 南方のムガル時代の墓（挿圖 5）と、いわゆる Balban の墓の遺跡とを混同したことは、この Khān-i Shahīd の墓についても、混同をおこさせた。すでに述べたとおりに問題のムガル時代の墓の東側にある四角 12 本柱の墓（挿圖 6）も、地方的には、Khān-i Shahīd の墓とよばれていたらしいことは A. S. I. の Delhi Monument List の報告によつて明らかである（前述40ページ参照）。

そこで、私は、これらのことがらから、かつて、問題のムガル時代の墓についても、それを Balban の墓とする傳承が、一時、存在していたのではないかと推測するのである。すなわち J. D. Tremlett は、自ら誤まりをおかしたのではなくして、おそらくは、このような傳承を傳えた案内人の説明によつて、問題の墓を Balban の墓の遺跡と教えられたのではないかと、私は考えるのである。いいかえれば、19 世紀の後半には、いつのころからかわからないが、問題のムガル時代の墓を Sulṭān Balban の墓と考え、その圍壁の東側に接して殘存していた四角 12 本柱の墓を、その子の Khān-i Shahīd の墓とする傳承が、一部で信じられていたのではないかと考えてみたのである。しかし、Syed Ahmad は、同じく 19 世紀のなかごろに、Balban の遺跡を、現存の廢墟の建造物の挿畫とともに紹介敘述しているのである。従つて、おそらく、Balban と、父の生前に悲劇的な戦死をとげたといわれる Muḥammad の墓については、同じくトップ地域南方の地に、それぞれ異なつた二つの遺跡が、一時、Balban 父子の墓の傳承の對象となつたのでないであろうか。それは、問題の Balban の墓とされるが、多年、廢墟として忘れられた遺跡であつたことから、近傍の人びとをして、別の、ずつと後代のムガル時代に屬する二つの建造物について同じような傳承を生ぜしめたのではないかと考えるのである。J. D. Tremlett の、遺跡の現状とあわせればなかなか了解に苦しむ敘述と、それとかなり合う

建物の存在、さらに Khan-i Shahīd の墓といわれる別の、おそらく初期ムガル時代と思われる小さい墓の残存している事実から、私は、右のような傳承がかつて存在したであろうことを推測したのである。

(2) 第二に補足的私見を述べたいのは、Dār al-amān についての一つの推論である。それは、問題の廢墟の遺跡を、Sulṭān Balban の墓であると考えた上での假説である。現在、問題の遺跡の立っている地帯は、岩磐と灌木のいわば荒地で、その西側には、ムガル時代の住居址（なかには有名な Sir Charles Metcalf がかつて住んでいた別宅の廢墟もある）や、いわゆる ganātī masjid（ガナーティー＝マスジッド）すなわち wall mosque（壁モスク）とよばれる少型モスクや墓地の遺構が混在している。ただの Balban の墓とされる廢墟の近傍には、せまい空地を隔てて、墓の建物の約40メートルほど南方に一つの變つた建造物の遺跡が残っている。ここに私自身がかつて撮影したところの



挿圖7. いわゆる Balban の墓とされている遺跡の南方に現存する建造物。

寫眞を掲載しておいた(挿圖7)。この遺跡は、1910年代の A. S. I. のデリーの遺跡の調査報告にも、第Ⅲ巻の Mahrauli 地区のなかに、No. 148. Tomb (unknown) として紹介されているが、同書では、時代区分については、“Pathan”としている。同報告は、「墓」としてはいるが、現在、その内部には、墓石はなく、またその痕跡もないのである。従つて、これが墓であつたかどうかは、いまでは、實は、よくわからないのである。

ところで、この建物の屋根はちよつと注意をひく。それは、A. S. I. の Delhi Monuments List にも “a plastered pyramidal roof” と記してあるように、まるいドームではなく、寫眞にみるような特殊なドームである。そのプラスターについては問題があるが、このドームは、クトップのモスクすなわち Qūwat al-Islām Masjid (クワットゥル=イスラーム=マスジッド) や、第1論文で詳細にあつかつた Sulṭān Ghārī などにある奴隸王朝時代の、あの特徴的な “pyramidal” なドームと、少くとも外觀は類似している。もつとも、奴隸王朝時代の屋根は、内部が、ヒンドゥーやジャイナ教寺院にみられる石造の圓形もち上げ式の構造であるが、この遺跡の場合はもちろん碎石モルタルをつみあげたドーム形式である。また、このようなドームは、デリー地域でも、トラグルク朝時代あるいはそれより前代にも、その例がみられるのであり、たとえば、トゥグルク朝時代のもつと推定される Bigampūri Masjid (ベーガムプリー=マスジッド) の南門の屋根には、まさに plastered pyramidal roof と呼ぶにふさわしいものが存在している。そして、トゥグルク朝後期の Firūz Shāh 時代の建造物には、こうしたピラミッド形の屋根はかなり存在するのである。従つて、この問題の小遺跡の屋根や建物全體が、直ちに奴隸王朝時代のものであるというのはかなりに危険である。しかし、かりに後代のもつとも、もとの原形を尊重して復原したということも大いに考えられるのである。

さらに注意すべき點は、この建物が、北面と南面に二本の柱状のつきだし部をもつベイ (bay) があり、いわば、門にふさわしい入口をつくつている點で

ある。また、この建物が、東西に圍壁らしきものを張り出していたらしい痕跡もあり、とくに、建物の西側にはその壁の一端らしい遺構が、寫眞の向つて左方にも認められるように、残つていたのである。こうした點を考えると、私は、この建造物は、A. S. I. 報告書のいうように墓ではなくして、門 (gateway) ではないかと推測したのであり、しかも、圍壁の一部に設けられた門ではないかと推定してみたのである。

とすれば、私のいわんとするところは容易に推定されるように、私は、これこそが、問題の Dār al-amān とよばれた、圍壁をもつていたにちがいない建造物の一部、おそらくはその南門の遺跡ではないかと想像し得るのではないかと思うのである。もつとも、この推論は、すでに述べたように、問題の Balban の墓の遺跡をそのまま承認し、しかもすでに紹介した文獻の内容を考え合せた上ではじめて想定し得る假設であることはいうまでもない。もちろん、この問題の小遺跡の様式と構造について比較研究を試みた上での時代區分が、この推論を最終的に評價する決め手となるであろう。この建造物の入口のアーチは、かなりの廣がりをもつものであり、もちろん、キー=ストーンを採用している。同時に、この遺跡の東側にこの壁もよく調査する必要がある。かりにこの建造物が後代の建造（あるいは補修）ということがわかつたとしても、この圍壁の遺構が奴隸王朝時代のものと推定されれば、Dār al-amān の比定については、かなり有力な資料となり得るであろう。そうなれば、Balban の墓の比定の根據として、かえつて有力な根據たり得るわけである。しかし、これについては、残念ながら私自身、デリー滞在當時には考えつかなくつたので、ここに補足の意味で、推理の一端としてつけ加えておく次第である。

(3) 最後に、さきにもふれた Bābur による記述について簡単に補つておきたい。Bābur は、さきに述べたように (16ページ参照)、デリーで、'Alā' al-Dīn Khaljī と Ghiyāth al-Dīn Balban の二つの墓をみたと記している。H. C.

Fanshawe が、それについて、Babūr がみたのは、Balban の墓ではなくて、Sultān Shams al-Dīn Iletmish の墓ではないかという疑問を記していることもすでに述べておいた (41ページ)。これはきわめてあり得ることであるが、私の第1論文「初期の墓」のなかで提出した Iletmish の墓についての疑問と、その際提出しておいた私自身の仮設とも関連することである。

Bābur が、クトップ=モスク西北隅にあるいわゆる Iletmish の墓をみのがしているのは、たしかにおかしいという疑問はもつともなことである。そこで、一つの推論として、いわゆる Iletmish の墓と、いわゆる ‘Alā’ al-Dīn の墓とは、いづれも、Qūwat al-Islam Masjid の墓の裏手にあり、前者はその西北隅、後者はその南西隅に近く残存しているのであるから、Bābur がみたのは、この二つであろうということは、きわめて自然に推測し得ることなのである。この推論に立つならば、(1) Bābur の誤記か、(2) クトップ=モスク西北隅の問題の墓は、Bābur のいう如くに、Iletmish の墓でなくして、Balban の墓である可能性がある、という二つの推定が可能である。しかし、このうち、第二の疑問については、きわめて興味があるけれども、すでに私は第1論文の終章において、その可能性の少ないことを述べておいた。⁽⁵⁶⁾ 従つて、私は、この問題については、(1) Babur は、デリー、おそらくはクトップ=モスクの近邊において上の二墓以外の場所で Balban の墓をみた。(2) Bābur は、Fanshawe が疑つたように、誤つた案内によつて、現在 Iletmish の墓といわれているモスク西北隅の墓を Balban の墓と伝えられたか、あるいは、それを記憶ちがいで Balban の墓と記したか、そのいずれかであろうと思う。しかし、私自身には、(2) の方の可能性は、(1) の推定よりも少ないように考えられる。結局、Bābur は、クトップ地域で、クトップ=モスクの裏手にある二つの墓以外の地に、Bābur の墓を訪ねたのかも知れない。もしそうであるとすれば、これは、本稿で問題にしてきたクトラブ南方の廢墟の遺跡の比定を支持する、一つの根拠たり得るであろう。もつとも、以上に記した推論は、クトップ地域

所在の 'Alā'al-Dīn Khaljī の墓の比定について一應肯定した上でのことである。従つて、'Alā'al-Dīn の墓といわれる建造物の比定について留保するならば、また別の推論が生れる可能性もある。しかし、それはたいへん煩雑となるので、いずれ Khaljī 朝時代の墓について考察する機会にゆずりたい。

補 註

1. 荒 松雄「デリーに現存する奴隸王朝初期の墓について」、東洋文化研究所紀要、第33冊、1964年3月、1—130ページ。同「デリーに現存する奴隸王朝中期の墓について」、同紀要第34冊、1964年3月、1—50ページ。以下、この二論考を、それぞれ、第1論文、奴隸王朝初期の墓；第2論文、同中期の墓、と略稱する。「奴隸王朝」という呼び方について、また、その場合の「奴隸」については、私自身、これまで随所で説明を加えてきたが、とくに拙稿「奴隸王朝の奴隸貴族について——Ṭabaqāt-i Nāṣirīに見える二十五人の Shamsī Mulūk を中心に——」東洋學報、Vol. XXXX, No. 4, pp. 24—78 を参照されたい。
2. 第1論文「奴隸王朝初期の墓」1—16ページ、序文——サルタナットの首都デリーとその遺跡の歴史的研究——参照。
3. このスルターンは、これまで、ふるくは Altamsh, Altamish, Iyaltmish などと書かれており、歴史家もふくめて現代の多くの學者は、Iluttmish という發音を採用しているが、トルコ人學者 Hikmet Bayur の所論（1950年）によつて、iletmish と讀むべしという意見が出され、それに従う學者もでてきた。それについては第1論文、109ページ、補註2を参照。本稿でも iletmish という發音を採用する。
4. これについては、第1論文、17ページ、また第2論文、補註1を参照。
5. Kilūkhārī については、奴隸王朝から次のハルジー朝にかけてのさまざまな問題がある。さしあたり、本稿であつかう奴隸王朝末期には、この地に王宮があり、サルタ

デリーに現存する奴隸王朝末期の墓について

ナットの支配層の邸宅をあつめ、首都デリーに對していわば離宮、別荘地的な地位にあつたらしいことにだけふれておこう。Kilūkhārī の成立とその位置の考證については、首都デリーの城砦と宮廷の變遷の初期の歴史の重要な問題點であり、別に稿を改めて述べるつもりである。

6. Sulṭān Nāṣir al-Dīn Maḥmūd の死について記した同時代の記録は一つもない。Ṭabaqāt-i Nāṣirī を書いた Minhāj al-Dīn は、彼がその著書を捧げたこのスルターンの死ぬ前にすでに世を去つているのである。そして、次にくるサルタナット時代の史書で現存するものは、Ziyā' al-Dīn Baranī の『Fīrūz Shāh の歴史』であるが、この書の記述は、Maḥmūd の次のスルターンである問題の人物 Balban の登位をもつてははじめられているのである。従つて、彼の死をめぐる事情や Balban の登位に關しては、從來から歴史家のあいだにも諸説があり、Balban がスルターン位を篡奪したという説をはじめ、彼が Maḥmūd を殺害したという説まである。これに對して、Maḥmūd の死は自然死であつて、Balban は合法的にスルターン位を繼承したとする説など、全く異なつた諸説も一方では行われている。
7. Balban のスルターン登位を、Baranī は、662 A. H. 年として記している。Ziyā' al-Dīn Baranī, Tārīkh-i Fīrūz Shāhī, Perian text ed. by Saiyid Ahmad Khān, Bibliotheca Indica Series, Calcutta, 1860—62, p. 25. (以下、このペルシア語刊本を Tar. Fir. (Barani, B. I.) と略稱する。)しかし、A. B. M. Habibullah が述べているように、Balban の貨幣で現在までに發見されているのは、664 A. H. 年以降のものであり、一方、Maḥmūd の貨幣は、664 A. H. 年までのものが發見されているのである。従つて、Baranī の記述は誤りであると考えられている。A. B. M. Habibullah, The Foundation of Muslim Rule in India, 2nd Rev. ed., Allahabad, 1961. (以下、本書を Habibullah とのみ略稱), p. 161. B. I. テキストも 664 A. H. 年を註記している。
8. 荒 松雄「奴隸王朝の君主權と貴族勢力」, 東洋文化研究所紀要, 第11冊, 1956, 1—24 ページ, とくに 16—23 ページを参照。(以下、この論文は「貴族勢力」と略稱) また、同じく拙稿「デリー・サルタナット初期におけるスルターンの繼承」, 同紀要, 第8冊, 1956年, 277—306 ページ, とくに 291—299 ページを参照。
9. これについては、正確に述べるためにはいろいろと記す必要があるが、ここでは、A. B. M. Habibullah の述べる結論を記すにとどめる。Habibullah, p. 178. および p. 186. Note 53. なお、これに關連して、Ziyā' al-Dīn Baranī は、Balban の次の

スルターンである Kaiqbād の登位の時を 685A. H. 年においているが、これは一般には誤りとされている。Habibullah, p. 186, Note 53. 参照。

10. その A. S. I. 所蔵の圖面は, “Balban’s Tomb, Qutb, Delhi. Conjecturally Restored” と題されている。そのネガ番號は, 4851.
11. Tar. Fir. (Baranī, B. I.), pp. 122—123.
12. この方の英譯はずつと簡單になつてゐる。念のために, 次に, それを轉載しておく。H. M. Elliot & J. Dowson, The History of India as told by its own historians. The Muhammadan Period. 8 Vols, London, 1871, Vol. III, p. 124. (以下, Elliot-Dowson と略稱する)。

“They (the Kotwal and his people) then took Kai-Kubād, the son of Bughrā Khān, and placed him on the throne with the title of Mu’izzu-din. The corpse of Sultān Balban was taken out of the Red Palace at night, and was buried in the house of rest and thus ended one who for so many years had ruled with dignity, honour, and vigour.....”

13. Voyage d’Ibn Batoutah, Texte Arabe, accompagné d’une traduction par C. Defrémery et B. R. Sanguinetti. Société Asiatique. Paris, 5^{me} tirage, Tome 3^{me}, 1949, p. 170. (以下, この書物は, Ibn Battuta (Def. Sang.) と略稱する。

なお, Ibn Battūta には, Rehla のインドに關する部分だけ, インド人歴史家でトゥグルク朝の研究者である Mahdi Husain による英譯があるが, その同じ部分を次にかけておく。The Rihla of Ibn Battūta (India, Maldivé Islands and Ceylon). Translation and Commentary, by Mahdi Husain, Gaekwad’s Oriental Series, No. CXXII, Oriental Institute, Baroda. 1953, p. 36. (以下, 本書は Ibn Battuta (M. Husain) と略稱)

“One of his good deeds was the building of a house called the house of safety (*dār-ul-amn*). The debtor who entered it had his debt paid by the sulṭān, and whoever sought refuge in it for fear was safe. And whoever entered it after having killed somebody, the sulṭān interceded on his behalf to conciliate the heirs of the deceased. And if a criminal sought shelter in it his pursuers were accorded satisfaction. It was in this house that he was buried. I visited his tomb.”

なお, アラビア語の原文では, 問題の建物, “*Dār al-amn*” となつてゐる。最近

のウルドゥー譯も、“*Dār al-amm*”と綴っている。Safar Nāmāh-i Ibn Baṭṭūṭah, mutarjmah Ratis Aḥmad Ja‘afari, Karachi, 1961, p. 532

しかし、前述したとおり、Baranī は、*Dār al-amān* と記しており、またこの Balban の建物ではないが、同じ名をもっているところの Ghiyāth al-Dīn Tughluq の建てた建造物は、のちに述べるように、その碑文をみても、また Futūḥāt-i Firūz Shāhī の記事をみても、*Dār al-amān* と讀めるので、ここでは、インド側の資料をもとにして、*Dār al-amm* でなしに、*Dār al-amān* の綴りを採用しておく。しかし、意味からいえば、後述するように、實は *amm* も *amān* も同じことである。

14. Annette S. Beveridge, The Memoirs of Bābur, New Translation of the Bābur-nāma, incorporating Leyden and Erskine’s of 1826 A. D. London, p. 475. たまたま、原文がみられないので、ここでは彼女の英譯のみに據る。補註は省いた。

15. この碑文については、次に述べるように、これまですでに紹介されているが、ここでは、それに、われわれ東大インド遺跡調査團の第2次調査（1961—62年）に際して撮影した寫眞と採取した拓本とを参照したことを附記しておきたい。しかし、ぎつりと刻みこんだ文字は私にはなかなか難しかった。この碑文の全文については、トゥグルク期時代の墓について考察する別稿に載せるはずである。さしあつて、この碑文については、例の A. S. I. のデリー遺跡報告書を参照した。いままでのところ、この碑文についてはもつとも信頼できる報告である。° List of Muhammadan and Hindu Monuments, Delhi Province, ed. by Superintendent, A. S. I. Calcutta, 4 Vols, 1916—1922 (以下、Delhi Monuments List と略稱), Vol. IV, pp. 4—5, No. 3. Tomb of Zafar Khan の項を参照。なお、この詳細な報告書については、拙稿第1論文「奴隸王朝初期の墓」、109—112 ページ、補註4を参照。

この碑文の Delhi Monuments List (Vol. IV) の英譯は、私が本文に引用した箇所のみをあげれば“Majlisi Ala erected the sacred building of Darul Amam for the deceased Khan”となつており、*Darul Amam* と記している。しかし、これは Zafar Hasan の誤りであつて、同報告書が載せられている碑文の文字を正しく音寫すれば、*Dār al-amān* となるのである。

16. この箇所は、Elliot-Dawson にもその譯があり、後半の部分はちよつと違つて簡單にしているので、念のために次にあげておく。*

“The *Dāru-I amān*, or House of Rest. This is the bed and resting

place of great men. I had new sandal-wood doors made for it, and over the tombs of these distinguished men I had curtain and hangings suspended.....” (Elliot-Dowson, Vol. III, p. 384.)

なお、この原文は、次を参照。Futūhāt-i Firūz Shāhī, Persian text ed. by Shaiḵh Abdur Rashīd, Muslim University, Aligarh, 1954, pp. 14—15; Futūhāt-i Firūz Shāhī, Persian text ed. by N. B. Roy, J. R. A. S. B., Letters 1941, p. 83. この文中の *Mazja'* および *Marqad* には、両方ともに「墓」の意味がある。

17. 現在、Muḥammad bin Tughluq の墓は、多くの學者によつて、Ghiyāth al-Dīn Tughluq Shāh の墓といわれる四角赤砂岩の建造物のなかの、もつとも東の端に並ぶ墓がそれであると推定されている。これには異論もあるが、それらについてはここでは一切省略する。結論のみをいえば、さきとその一部を紹介した碑文のなかの *Dār al-amān* と、Futūhāt の文中に見える *Dār al-amān* との関係から、私は、Muḥammad bin Tughluq は、通説の如く、現在、Ghiyāth al-Dīn の墓といわれている右の建造物のなかに、のちに合葬された可能性がつよいと考えるものである。そう推定してみると、Futūhāt に、記載の場所をことにして、ちよつと讀めば、誰の墓かよくはわからないように記されているところの、前掲 (a) の文中の *Dār al-amān* の記述は、この同じ建物、すなわち Ghiyāth al-Dīn の墓のある場所と考えてきわめて自然ではあるまいか。この (a) の文章でいう “*makhḍūmān*” あるいは “*khudāw-andgāran*”, すなわち「偉大なる人びと」(複数) というような意味の語は、まさに Ghiyāth al-Dīn と Muḥammad の二人を意味していると考えていいであろう。このこと自體が、實は、すでにふれたように、私が Muḥammad の遺體が、Ghiyāth al-Dīn の墓廟に併葬されたという推定の一つの文獻的根據と考える點である。これについてのくわしい推論は、別稿にゆずりたい。なお、この部分の Dowson 譯は次のとおりである (Elliot-Dowson, Vol. III, pp. 385—386.)。

“.....These deeds were put into a chest, which was placed in the *Dāru-l amān* at the head of the tomb of the late Sultān,.....”

18. S. H. Hodivala, *Studies in Indo-Muslim History, A Critical Commentary on Elliot and Dowson's History of India as told by its own historians*, Bombay, 1939 (以下、Hodivala, Vol. I. と略稱する), p. 262; Ibn Battuta (M. Husain), p. 36, Note 1.
19. *Ṭabaqāt-i Akbarī*, Persian text ed. by B. De, *Bibliotheca Indica Series*,

- Calcutta, Vol. I. 1913, p. 103. なお, B. De の英譯は, これを Dār-al- Āmān とし
て “the mansion of safety, the royal cemetery” としている。The Tabaqāt-i
Akbari of Khwājah Nizāmudīn Aḥmad, English Translation by B. De, Cal-
cutta, Vol. I., 1927, p. 119.
20. Tārīkh-i Firīshṭah, Persian text published by Nawal Kishaur, Lucknow,
刊年不詳, p. 83. その表現は, Tab. Akb. と全く同じで, “dar Dār al-amān mad-
fūn gasht” とある。ただし, この部分は, いわゆる「Briggs 譯」として知られて
いる John Briggs, History of the Rise of the Mahomedan Power in India, till
the year A. D. 1612, translated from the Original Persian of Mahomed Kasim
Ferishta, Calcutta, 1908, 4 Vols, Vol. I のなかには載せられていない。
21. ‘Aīn-i-Akbari of Abul Fazl-i-‘Allamī, Vol. II, translated by H. S. Jarett,
Bibliotheca Indica Series, Rev. ed. by Jadu-nath Sarkar. Calcutta, 1949, p. 283.
22. Hodivala, Vol. I, p. 262.
23. Elliot-Dowson, Vol. III, p. 593.
24. Ibn Battuta (M. Husain), p. 35.
25. Elliot-Dowson, Vol. II, p. 124.
26. Ibn Battuta (Urdu), p. 532. “us kī qabar bhī us kē *makan* men banāī’ gai’
hai.”
27. F. Steingass, A Comprehensive Persian-English Dictionary. London, 1892,
p. 101.
28. こうしたことがらについては, 例えば, 拙稿「貴族勢力」, 21—23 ページを参照。
29. Tar. Fir. (Barānī, B. I.), p. 138. これは, 奴隸王朝中期の Mu‘izz al-Dīn の治
世に, Malik al-Umarā (マリクル = ウマラー) がいつたとされる言葉のなかにある。
この記事は, もちろん, 一種のたとえ話にしかすぎないが, ちよつと興味がある内容
である。関連部分を英譯すれば,
“……if you cannot give it up, you may indeed bid farewell to life
and set about building your tomb……”
その後半のペルシア語原文は, “wa *khaṭīrah-i khurd rā* ‘imārat farmā…” で
ある。英譯には, P. Whalley, Translations from the Tārīkh-i Firūz shāhī. J.
A. S. B. Vol. XXXX, 1871, p. 194 参照。
- なお, 拙稿第2論文, 「奴隸王朝中期の墓」のなかで, 本文26ページ, 補註37に

において Mun. Taw. の記事を引用解釋した際、B. I. テキストのベルシア語原文中の “*khatīrah*” について、G. Ranking の註の説に従つて、“*ḥaẓīrah*” の誤りであるとした。また、“*khatīrah*” はもちろん、“*ḥaẓīrah*” にも、「墓」そのものの意味はないことをも記した。しかし、上に引用したところの Barani の文中の語も “*khatīrah*” となつている。

しかし、私がさきに第1論文「初期の墓」で言及した Yahyā bin Aḥmad (ヤハヤー=ピン=アハマド) の Tārīkh-i Mubārak Shāhī (ターリーヘ=ムバーラク=シャーヒー) のなかの Qnīb al-Dīn Aibak (クトッブディーン=アイバク) の墓についての文章中でも “*ḥaẓīrat*” の語が用いられている(第1論文, 86 ページ)。してみると、“*khatīrah*” はやはり “*ḥaẓīrah*” の誤りとしても、もともと「墓」の意味はなかつた “*ḥaẓīrah*” の語は、少くとも、中世インドでは、“*tomb, mausoleum*” の意味に一般に用いられていたことは、どうも、たしかなようである。私の誤謬とまではいかないが、ここに、若干、さきに記した點を補正しておきたい。

30. Saiyid Aḥmad Khān, *Āthār al-Ṣanādīd*, Orig. ed., 1895, Calcutta, Part I, p. 70. *Āthār* については、第1論文、補註11, 21などを参照。この著名な書物には、初稿本(初版1847年)と改稿本(初版1857年)とがあるのであるが、私の使用している刊本は、前者(Orig. ed. と略稱)は1895年、Lucknow(ラクナウ)の Nawal Kishaur 版、後者(Rev. ed. と略稱)は1904年刊の Cawnpore 版である。これには、次に記す如く、フランス語の譯書が、改稿本について出版されている。

Garçin de Tassy, *Description des monuments de Dehli en 1852, d'après le texte Hindoustani de Saiyid Ahmad Khan*, *Journal Asiatique*, Juin, 1860 (pp. 508—536); Août-Sept., 1860 (pp. 190—254); Oct.-Nov., 1860 (pp. 392—451), Dec., 1860 (pp. 521—543); Jan., 1861 (pp. 77—97).

このフランス語譯については、第1論文、補註12を参照されたい。以下、De Tassy (Fr. tr.) と略稱する。

31. Ahmad Khan (Rev. ed.), Part III, p. 26.
32. このウルドゥー原文の “*apnē sāmnē*” というのは、もともと「自分の前で」という意味であるが、ここでは「生前に」という意味と思う。Garçin de Tassy も “*de son vivant*” と譯している。ついでにいうと、De Tassy は、Balban を、“*Gayās Bal:n*” と讀みちがえて音寫してしまつている。拙稿第1論文、補註12参照。De Tassy (Fr. tr.), Oct.-Nov., 1860, pp. 396—397.

33. Ahmad Khan (Rev. ed.), Part I, p. 15.
34. Sujān Rāi Bhandārī, Khulāṣat al-Tawārīkh, Perisan text ed. dy Zafar Ḥasan, Dihli, 1918. p. 28. Balban の城砦については, “Sūbah-i Dār al-Khilāfat Shāh-jahānābād” の項に出ている。これはデリーの城市の歴史を簡単に列挙したもので, Balban についての個所を英譯すれば, 次のとおり。
- “……Sulṭān Ghīyāth al-Dīn Balban founded [*asās nihādah*] another fort, and, in the year of 666 hijrī, named it Marzghan.”
- なお, Elliot-Dowson, Vol. VIII の “*Khulāṣatu-l Tawārīkh*” の抄譯に, たまたまこの部分が載せられているが, そこには, “In the Year 666 Hijra (1267—8 A. D.) Sultān Ghīyāsu-d din Balban built another fortress, which he called *Shahr-zaghan*.” (2. [*The Arāish-i Mahfil* calls it “*Marzaghan*”]) とでている。Elliot-Dowson, Vol. VIII, p. 11. Dowson はどの寫本を用いたか記していないが, “*Shahr-zaghan*” という名は, これは他の書物にくらべても明らかに誤寫であろう。
- なお, Rāi Bindrāban, Khulāṣat al-Tawārīkh, および上述の *Ārāish-i Maḥfil* については, C. A. Storey, *Persian Literature, A Bio-bibliographical Survey*, Section II, Fasc. 3, London, 1939, pp. 452—458 を参照。
35. Ahmad Khan (Orig. ed.), Part IV, p. 4. なお, ‘*Qil’ah-i Marzghan*” なるものについては, 諸説があるので, くわしい考察については, 別稿にゆずる。
36. A. Cunningham, *Report of a Tour in Eastern Rajputana in 1882—83.* (Vol. XX), Calcutta. 1885, p. 133.
37. J. D. Tremlett, *Notes on Old Delhi*, J. R. A. S. B., Vol. XXXIX, Part I, 1870. pp. 78—79.
38. *Delhi Monuments List*, Vol. III, No. 149, p. 95. これには, “some 300 yards south of the mosque of Jamali” としている。
39. Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi*, 1876, Ludhiana, pp. 79—81. なお, この著書については, 拙稿, 第1論文, 補註14を参照されたい。
40. この点については, 彼は, 自らその “Preface” で, Ahmad Khan と Cunningham の兩著書が, 彼の敘述の主な材料であることを述べている。ただ, Carr Stephen は, 彼がいつ, どれだけ, 自分で遺跡を親しく見て廻つたのか, それについてはほとんどふれていないのである (p. i)。「彼自身がその紹介している遺跡と建造物を, ど

の程度に、自らの足と眼とで現地に赴いて観察したかどうかについては、ときに、相當疑問を感じた個所があつた」(拙稿, 第1論文, 補註14.)

41. Delhi Monuments List, Vol. III, No. 150, p. 95 (なお, p. 93 は原書の誤植)。この A. S. I. の報告書では, Tomb locally known as that of Khan Shahid として紹介されており, 時代区分は, Pathan としている。次に右報告書に記された建造物の状態について, 少し引用しておこう。

“The tomb supported on twelve hard columns is covered with a vaulted roof of brick and plaster. The ceiling is adorned with geometrical patterns and religious inscriptions elaborately incised in plaster. Externally the frieze was ornamented with blue tile work traces of which still remain. The tomb measures 16' 11" by 11' 9". There is no evidence to prove as to where Khan Shahid was actually buried. Local tradition assigns this tomb to him, while Sayyid Ahmad Khan relates that the prince was buried in the tomb of his father.....”

42. H. H. Cole. Delhi: Preservation of National Monuments, India, 1884, p. 3. “Classification of the Delhi monuments” と題する表のうちの (3) Muhammedan の (A) Ghori Pathan の (8) から (16) のうち, “Tomb of Balban” は, (16) Palace at Kilokheri の前の (15) に数えられている。
43. H. C. Fanshawe, Delhi, Past and Present. London, 1902, pp. 277—278. “..... On each side of it is a spacious room, which may have formed the Dar-ul-aman, or Heaven of Refuges, established by this king.....” (p. 278) 以下, 本書は Fanshawe と略稱する。
44. Fanshawe, p. 277, note 1.
45. G. R. Hearn, The Seven Cities of Delhi, London, 1906, p. 181.
46. Bashīr al-Dīn Aḥmad. Wāqī'āt-i Dār al-Khukūmat-i Dihlī (in Urdu), 3 Vols, 1919, Vol. III, pp. 328—331. この Bashīr al-Dīn の場合には, その見出しまで, Carr Stephen に似ている。ただし, その年代は誤っている。Kūshak L'al (664 A. H., 1265 A. D.); Qila'ah-i Marzghan (666 A. H., 1267 A. D.); Dār al-āmān, Shāh-i Ghiyāth al-Dīn Balban kī Qabr (664—86 A. H., 1265—87 A. D.)
- 年代については, 例えば, Khān-i Shāhid の没年を, 彼は, 683 A. H. 年 (1284 A. D.) としているが, Carr Stephen は, 684 A. H. 年 (1285 A. D.) を採っている。

る。また、Dār al-amān (見出しでは彼は、Dār al-āmān としている) を、文中では、Dār al-Islām としている (ここでも年代を Carr Stephen より一年おくらせている)。もつとも大きい誤まりとしては、Carr Stephen が、Balban と同じく ‘Alā-uddin Khiljī も “Red Palace” より遺體を移されたと述べた点について、Bashīr al-Dīn は、Barani の文章をあげているが、「Balban の棺 (*na‘ash*) は、Sīrī (スィーリー) の Lāl maḥal (ラール=マハル) から外へ運び出され、Jāma‘ Masjid (ジャーマ=マスジッド) の前に埋葬された」と書いている点である。これは、明らかに、‘Alā’ al-Dīn *khiljī* と Balban を混同してしまつた結果の誤まりである。Balban の時代に Sīrī の城砦はまだできていないはずはない。その城砦は、‘Alā’ al-Dīn の建てたものだからである。なお、Bashīr al-Dīn のこのウルドゥー著書については、拙稿、第1論文、補註18を参照されたい。

47. Delhi Monuments List, Vol. III. No. 147, pp. 94—95, Tomb of Balban.
48. Henry Sharp, Delhi, Its Story and Buildings, 2nd ed., 1928, p. 43.
49. The Cambridge History of India, Vol. III, Turks and Afghans, Chap. XXIII, p. 582.
50. Percy Brown, The Architecture of India, Islamic Period, Bombay, 1942, p. 15.
51. 例えば、Habibullah, pp. 363—364. これらの歴史家たちまで、ほとんどなんらの抵抗感もなしに、問題のクトゥブ南方の遺跡を、直ちに Sulṭān Balban の墓として受け入れていることは、いささか残念である。Habibullah の考察は、一般にはかなり慎重であるが、遺跡に関しては、この建造物を、Balban のみならず長子 Muḥammad の墓とも考えている。さらに、Encyclopaedia Islamica の Delhi の項 (1963年刊) に簡単な記述が、Burton Page によつてなされているが、ここでも、“the tomb of Sultan Balban d. 686/1287” として疑いをはさんでいない。(Enc. Isl., N. S., Vol. II, p. 260)
52. Y. D. Sharma, Delhi and Its Neighbourhood, ed. by Organizing Committee of the XXVI International Congress of Orientalists, New Delhi, 1964, p. 18, pp. 56—57.
53. このことについて、もつともよく述べているものとしては、Percy Brown, p. 15. および、John Marshall, p. 582. を参照。
54. Percy Brown, p. 15.
55. Delhi Monuments List, Vol. III, p. 95. (p. 93 とあるのは原報告書の誤植で正し

くは p. 95) その No. 148, Tomb (unknown) に記された内容を念のために以下に転載する。

(b) some 65 paces to the south of No. 147 (Tomb of Balban)

(e) Pathan

(j) It is crowned by a pyramidal roof and has a semi domed bay projecting to south with an entrance between two stone columns. There is no grave inside. The building is surrounded by ruined walls.

56. 拙稿, 第1論文, 「奴隸王朝初期の墓」, 177 ページ参照。

〔附記〕 1. 本紀要第33・34冊に発表した第1および第2論文について, 二三の方がたから, ペルシア語, ウルドゥー語などの文章の翻譯は日本語にした方がいいのではないかという意見が寄せられた。日本語の論文であるから, そのことはまことに當然であり, 實は, 私も最初の草稿ではすべて日本語に譯したのである。

日本の學界では, いまでも, ペルシア語やウルドゥー語を使うひとはそれほど多くない。それに比べると, インドやパーキスターンの學者には, ウルドゥー語はもちろん, 中世インドのペルシア語の文獻を, すらすら讀解できる人びとが相當いる。私は, 私の日本文の小論が, 言葉の障碍のために, 外國人の學者には全文を讀んでもらえないにしても, ローマ字をなるべく入れることによつて, ほぼ, 内容や引用文獻や史料の内容がなんであるかを, これらの外國の學者にもわかつてもらえるように工夫したのである。

従つて, とくにそれぞれの論文の主題の論旨に關係する史料やウルドゥー書からの引用の場合には, 英譯を載せることにした。實は, 私自身, これらの言葉の讀解力がきわめて不十分で, ときどき, 専門家に教わりながら, 辭書をつねにかたわらにおいて, 苦勞しながら翻譯している實情である。日本語に譯すよりは, 少々文體はあやしいところがあろうと, ともかく英譯しておけば, それだけ, 誤譯や不適當の譯文を, 將來, ずつと多くの人びとから指摘してもらえんと思つたからである。拙稿の主題に關する, もつとも重要な史料の一部を, タイプライターによるアラビア文字で, その原文を載せるように試みた理由の一端も, そこにある。

2. 本論文に使用した寫眞のうち, 挿圖3, 6は三枝朝四郎氏が, 挿圖1, 5, 7は私自身が東大の調査に際して撮影したものであり, いずれも, 調査團の承認を得て使用した。挿圖2の寫眞のみは, 私が, 1954年に撮影したものである。